

『Perspectives in Sociology』に見た Ethnomethodology の自画像

—「気がつかないもの」と「気にもかけないもの」—

岡田光弘[†]

はじめに

エスノメソドロジエは、1954年にシカゴ大学を中心とした陪審研究に参加していた Garfinkel の「何が彼らを陪審員にしているのか」という問いから始まったという (Garfinkel 1967=1987: 12)。Garfinkel は「『エスノ』という言葉は、ある社会のメンバーが、彼の属する社会の常識的な知識を、『あらゆること』についての常識的な知識として、なんらかの仕方を利用してできるということを示す」(Garfinkel 1967=1987: 14) として、これをヒントに、先の問いに答えようとする中で手にした概念に「エスノメソドロジエ (以下、本文中は EM)」というレッテルを貼った。そうであるなら、「何が人々を X にしているのか」という問いにどう答えるかが、「EM とは何か」を示していると言えるだろう。

1 対象

英国のエスノメソドロジストたちによって書かれた社会学理論の教科書『Perspectives in Sociology』の初版は1979年に出版された。この本は、その後、著者の陣容を変えながら版を重ね、2006年には第5版が出版されている。以下がその目次である。

1979年, 1984年版 目次

- 1章 社会学の視角の性質
- 2章 視角としてのストラクチュアリズム (I) コンセンサス
- 3章 視角としてのストラクチュアリズム (II) コンフリクト
- 4章 視角としてのシンボリック相互作用論
- 5章 視角としてのエスノメソドロジエ
- 6章 社会学の視角と調査研究の戦略
- 7章 結論

1990年版 目次

- 1章 社会学の視角の性質
- 2章 視角としてのストラクチュアリズム I, コンセンサス
- 3章 視角としてのストラクチュアリズム II, コンフリクト
- 4章 視角としてのストラクチュアリズム III, 批判理論
- 5章 意味と行為: I, シンボリック相互作用論
- 6章 意味と行為: II, エスノメソドロジエ
- 7章 社会学の視角と調査研究の戦略
- 8章 結論

1998年版 目次

- 1章 序論: 社会学再考
- 2章 カール・マルクス

[†]国際基督教大学教育研究所 okada@emca.net

- 3章 マックス・ウェーバー
- 4章 エミール・デュルケム
- 5章 コンセンサスとコンフリクト
- 6章 シンボリック相互作用論
- 7章 エスノメソドロジー
- 8章 西欧マルクス主義
- 9章 構造主義
- 10章 ポスト構造主義：理性の放棄
- 11章 ミシェル・フーコー
- 12章 ポスト構造主義とポストモダン
- 13章 社会学理論への回帰：理論主義と総合
- 14章 結論

2006年版 目次

- 1章 序論：社会学再考
- 2章 カール・マルクス
- 3章 マックス・ウェーバー
- 4章 エミール・デュルケム
- 5章 コンセンサスとコンフリクト
- 6章 シンボリック相互作用論
- 7章 エスノメソドロジー
- 8章 西欧マルクス主義
- 9章 構造主義
- 10章 ポスト構造主義：理性の放棄
- 11章 ミシェル・フーコー
- 12章 ポスト構造主義とポストモダン
- 13章 社会学理論への回帰：理論主義と総合
- 14章 階級から文化へ：歴史的素描
- 15章 解放の社会学：フェミニズム、クイア理論、そしてポストコロニアル理論
- 16章 結論

本稿では、彼らがエスノメソドロジーについて解説した章（初版、第2版での題名は「Ethnomethodology as a Perspective」, 以下、第3版

は、「Meaning and action: II, Ethnomethodology」, 第4, 5版は「Ethnomethodology」)について検討していく（以下に、各章の目次を示した）ことで、EMの初発の問いである「何が人々をXにしているのか」、ひいては「EMとは何か」という問いへの答えの変化を示そうと思う。

1979年版 5章目次

- ・序論
- ・ Alfred Schutz：現象学とエスノメソドロジーの起源
- ・ Berger と Luckmann：知識社会学を再考する
- ・ Harold Garfinkel：エスノメソドロジーの概念的な枠組み
メンバーによる方法
文脈依存性
相互反映性
成員性
想像による例
- ・ Garfinkel：経験的な例証
社会秩序を破壊する
活動中の陪審員たち
職場での検屍官
- ・ Garfinkel：要約
- ・ Aaron Cicourel：エスノメソドロジーと「既存」の社会学
- ・ 会話分析：トークを通して社会的な活動を達成するメンバーによる方法
Harvey Sacks：記述の達成
Emmanuel Schegloff：場所の記述
Schegloff：会話のシークエンシャルな組織化
- ・ 結論：批判的な反響

1984年版 5章 目次

- ・序論

- ・ Alfred Schutz : 現象学とエスノメソドロジ
の起源
- ・ Harold Garfinkel : エスノメソドロジの概念
的な枠組み
活動の「内側」からの組織化
メンバーによる方法
成員性と常識による知識の機会に即した利用
- ・ Garfinkel : 経験的な例証
社会秩序を破壊する
アグネス : 管理された達成としての性のアイデ
ンティティ
職場での検屍官
- ・ Garfinkel : 要約
- ・ Aaron Cicourel : エスノメソドロジと「既
存」の社会学
- ・ 会話分析 : トークを通して社会的な活動を達成
するメンバーによる方法
Harvey Sacks : 記述の達成
Emmanuel Schegloff : 会話のシークエンシャ
ルな組織化
Lynch : 「実践的な探求」としての自然科学—
科学的な事実の達成
- ・ 結論

1990年版 6章 目次

- ・ 序論
- ・ エスノメソドロジの起源
- ・ 経験的なプログラムとしてのエスノメソドロ
ジの確立
- ・ 社会秩序の「現場でのローカルな産出」
- ・ 成員性と常識による知識の機会に即した性格
- ・ メンバーによる方法
- ・ 会話分析 : トークを通して社会的な行為を達成
するためのメンバーたちの方法
- ・ ワークの研究 : エスノメソドロジと「自然に

- 起こる普通の行為」の研究
- ・ エスノメソドロジへの批判
- ・ 結論

1998年, ならびに2006年版 7章 目次

- ・ 序論 : エスノメソドロジ・相対主義, 主観主
義の社会学
- ・ エスノメソドロジの基礎
- ・ Schutzと現象学
- ・ Garfinkel : 社会秩序について再考する
- ・ エスノメソドロジとはいかなるものか
- ・ 会話分析とはいかなるものか
- ・ 自己組織化としての行為の研究 : 全体像を無視
するのか
- ・ 相対主義, 再び, そして相互反映性
- ・ 結論

2 「気がつかないもの」と「気にもかけないもの」

エスノメソドロジストの自画像は, 30年のあ
いだに変化している. 初期においては「文脈依存
性」や「相互反映性」と言ったEMに特有の概
念の解説や, 個々の研究者の業績の紹介がその中
心であった. 力点の変化は, 「検屍官の研究」の
扱いの中にも見て取れる. この研究は, 初版と第
2版では, 実践的な推論が目に見える「方法的」
なものであることを示すために「陪審員の研究」
と対にして示されている. 第3版(1990年版)
では, 「ドキュメントを証拠として全体を説明す
る方法」の例として, 「中間施設」研究と対にさ
れる. 第4版以降では, 「そこにいる誰にでも自
明」だが, 社会学者が研究対象にしてこなかっ
た, 社会学研究に「欠けている何か」について
の例として, 科学研究と組み合わせられる. このよ
うに自画像には, 微妙な変化がある.

さて、EMの自画像の変化の原因のひとつは、Peter Winch についての再評価があるだろう。1958年に、Winchの『The Idea of a Social Science』が出版された。Winchの本は、「相対主義論争」を巻き起こすなど、実証主義的な社会学に大きな衝撃を与えた。それ以前（それ以後もではあるが）の社会学における支配的な姿勢は、実証主義的な仮定を共有してきた。それは、たとえば、社会学は自然科学の道にしたがっているので、社会学もまた、リアリティを科学的方法という観点から定義するようになるとする仮定である。社会学的なリアリティは、これらの方法を通して定義される。自然科学を見習って実証主義にしたがうなら、私たちは、社会学的な研究を終わらせた場合にはじめて、社会的なリアリティとはどのようなものであるかを知ることになる。EMの主張は、これが間違いであるということである。日常生活を支えている常識による知識は、社会学的な研究によって、廃棄できるものではない。この点を鋭く指摘する、Winchによる実証主義への一撃は、EMが、Edmund HusserlやAlfred Schutzを引いて主張してきた論点と軌を一にしている。

WinchはWittgensteinを引き継ぎ、社会学的な理論と方法の問題についての哲学の性格に関するWittgensteinの議論を適用した。Winchの関心は、社会的な世界についてどの程度まで経験的な研究が可能なのかということであった。そして、社会を分析し理解するとは何かということだった。彼は、自然科学が、社会科学のモデルにならないと主張した。なぜなら、自然科学を真似ることは、経験的な問題と概念的な問題のあいだの混乱を見逃すことになるからである。これを認めるなら、自然科学をモデルにする実証主義は、その影響力を失うことになる。

Winchは、私たちのリアリティそのものが、私たちが事実について考える方法と、私たちがそれらの事実を記述する言語や概念から構成されることを強調した。思考、ひいては活動は、言語や概念の使用から生じるものである。私たちはそれらを、言語や概念の性格にふれること抜きで考慮することはできない。異なる文脈においては同じ言葉が別の意味を持つというEMでいう「文脈依存性」である。そのとき、私たちは、人々が状況の中で「理解すること」を分析しなければならない。社会学者として、私たちが調査する場や活動がどのようなものであれ、それぞれの場で人々が何をしているかを知ること、その特定の場や状況で用いられていて、「そこにいる誰にでも自明」な言語や概念を把握することなしには不可能である。この事実を認めるなら、「何が人々をXにしているのか」を知ろうとする社会学、すなわちEMは、それぞれの場や状況での言語や概念の使用をフィールドワークしていくことが必要になる。

自画像の変化の原因のふたつめとしては、初版から一貫して対として語られてきた、シンボリック相互作用論に対する評価が定まったということが考えられる。1990年版（第3版）は、シンボリック相互作用論とEMのあいだにある類似性と相違に関するいくつかの論点で締めくくられている。この両者は、一般的なレベルでは、それらは、社会的なプロセスの質的な研究を強調する点で類似している。そして、どちらの取り組みも、社会生活における言語の中心性を再評価することに貢献してきた。とはいえ、それらの違いを認識するのは困難ではないと言う。シンボリック相互作用論者の研究は、典型的には、「社会的な意味」を同定することに関わるものである。何らかの集団の行為者たちが、行為者たちが、お互いに他の

集団と持つ関係という見地から、これらの意味を共有し、説明することに関心をもつ。このように、シンボリック相互作用論者は、行為者や、その信念に関心を持つ。エスノメソドロジストは、対照的に、行為者よりむしろ、行為や活動に関わる。エスノメソドロジストが尋ねることは、どのようにそのような意味が「現場でローカルに」管理されるか、そして場にいるメンバーが、その理解の、いまここの実践的に適切な関連性を達成する方法である。この点で、EM 的な研究は、シンボリック相互作用論者の研究が始めたところで終わると言う。

この相違は、シンボリック相互作用論から EM への力点の移行である。それを分析的な焦点のレベルのシフトとして特徴づけることができる。このシフトは、採用されている概念の違いに明らかである。シンボリック相互作用論者が「自己」と「他者」、「共有された象徴」と「共同の行為」について語るところで、エスノメソドロジストは、理解の「現場でのローカルな産出」や、状況に即した特別なものに対してメンバーが「意味をとる」方法について語る。非常に単純化して言うと、シンボリック相互作用論は、典型的には、印象主義的で「厳密でない」。それに対して EM は、はるかにテクニカルで精密な傾向がある。

著者らによると、両者の最も顕著な相違は、ことによると、その研究のプログラムの活力にある。1990年の時点で彼らは、シンボリック相互作用論は、その最も生産的な段階を過ぎたという。いくつかの申し分のない経験的な研究は、相互作用論の伝統の中で依然として行われている。だが、近年には、新しい考え方は、ほとんど現れていないという。他方で、EM は、依然として、その考えを発展させており、研究すべき新しい現象を見つけているとする。

その後、第4版以降においては、シンボリック相互作用論の章の冒頭に Winch の議論が紹介され、EM とシンボリック相互作用論とがひとまとまりのものとして語られる度合いが強くなっていく。そこで明確に言われているのは、シンボリック相互作用論は、異なる種類の仕事のあいだの類似性のほうに関心を持ち、表面上は異なるすべての多くの種類の仕事に共通の社会的な過程が見られる程度を強調することを狙いとしているということである。他方、EM は、具体的な仕事の詳細を同定するほうに興味を持つとしている。1990年版では、事実問題として言われていた生産力の消長は、Winch の議論を前提とするなら、メンバーが用いている概念の豊かさに由来するプログラム自体の生産性が産み出しているものだということになる。

理解という論点を真剣にうけとめると、自文化内にこれまでそういった関心で扱われていない研究対象が満ちあふれている。まとめて「ワークの研究」と呼ばれる EM が数多く行なわれるようになったことにも、その変化が読み取れる。自文化において「気がつかないもの」の多くは、達成されるが「気にもかけないもの」であり、EM が丹念に調査研究を行なう価値のあるものだということになる。

序論（1979年版，一部抜粋）

エスノメソドロジーは、近年、社会学において発展してきた。それが基づいている考え方の多くについて、社会学には長い歴史がある。とはいうものの、その存在は、1967年にHarold Garfinkelが『エスノメソドロジーについての諸研究(Studies in Ethnomethodology)』を出版してから公式な取り組みとして認められた。今日でも、エスノメソドロジストたちの数は、依然として、相対的に見ては少なく、出版された研究の量もごく少数である。とはいえ、エスノメソドロジーは、社会学の内部で、かなりの注目と批判を引き付けてきた。エスノメソドロジーの影響力は、その考え方の革新的な性格として見られることに起因してきた。一見すると、エスノメソドロジストたちの関心は、一般的な意味で、前の章で記述したシンボリック相互作用論たちの関心に類似したものである。シンボリック相互作用論も、エスノメソドロジストも、両者とも、主に、個人間の社会的な相互行為を研究することに関心をもっている。両者とも、相互に解釈しあう作業を含めて、社会的な相互行為を、人々のあいだの意味ある伝達に関する行為を構成するものと見なしている。とはいえ、この表面的な類似性を超えると、取り組みとしてのエスノメソドロジーとのあいだには著しい違いがある。エスノメソドロジーは、人間とその社会的な世界に関する性質について、異なる前提から出発している。本来は、Edmund Husserl (1838-1938)による哲学の形態で提示されたものである。また、より社会的な指向をAlfred Schutz (1899-1959)から与えられている。私たちは、Schutzから始めることにする。

Alfred Schutz：現象学とエスノメソドロジーの起源

Schutzの狙いは、Husserlの現象学的な哲学を利用することによって、社会生活の研究を形作る新たな基礎を構築することであった。Husserlは、人間の経験の究極的な基礎を、日常の経験の特定のものを「超越して見る」ことによって記述しようとした。「現象学」とは、この試みにかかわるものだった。それは、それらを支持する「本質」を記述するためのものであった。彼が主張したことは、私たちによる世界の経験は、私たちが知覚する現象の「本質」を理解する私たちの能力に依存しているということである。本質に対する理解は、すべての経験の基礎である。なぜなら、このような方法でのみ、私たちは、自分たちにとって、それが理解できるものとして認識したり、分類したりすることができるからである。

このような本質を理解するためには、私たちは、「自然的な態度を一時的に中断」しなければならない。これによって、Husserlが言わんとしたことは、私たちは「エポケー(判断を停止すること)」という方法を用いて、自分自身を、世界に関する私たちの普段の考え方から引き離さなければならないということである。この方法は、思考する人が「世界を括弧に入れ」、それによって「意識の流れ」、すなわち、人間の現存と人間の知識を構成する—過去と現在と、予測されること—の経験の流れについて検討するために、「自分自身を解放する」必要がある。

Husserlの目的は、世界における現象を、ある種の、または別の種類の対象または出来事と知覚することで、私たちが、必然的に、これらの対象が他者によっても見られたり聞かれたり触れられたりするものと想定することである。要するに、私たちは、本質的な点において、他者にとって

も、これらの対象が、自分たちにとってあるのと「同じ」対象または出来事であると想定している。このように、体験の基礎は、孤立した個人の心に属するものではない。むしろ Husserl が、「生きられた経験の世界」と呼んだものの一部なのである。この世界は、他者と共通のものとして知られている社会的な世界なのである。

Schutz の研究は、主として、これらの考えを社会生活に関する哲学的な考察よりも、むしろ科学的な研究に発展させ適用しようと試みたものであった。彼は「社会生活の現象学」を作り出したかった。それは、彼にとっては、より良い社会学の基礎を作り出すものだった。それは、既存の社会学的な取り組みの想定よりも、人間とその社会的な世界の性質に関する「より正当な」想定に基づいていた。それゆえ、より良いものとなったはずである。

Schutz が、はじめて自分の考えを提示したのは、Max Weber の「解釈的な社会学」を批判した見方である。Schutz は、人間 (Schutz の用語でいえば「行為者」) は、彼らの日常の社会生活を、社会的に意味のある現実として経験するという Max Weber に賛成することから始めている。私たちは、他の人が何かを言ったりしたりするとき、それらの動きや言葉の意味を理解している。日常的で社会的な世界は、「解釈による現実」なのである。

とはいえ、Schutz にとっては、Weber の考え方は、社会的な現実を分析する出発点にすぎなかった。Schutz の信じるところでは、Weber の社会的な現実に対する分析は、本当の問題が始まる、まさにその時点で終わってしまっている。Schutz は、Weber の社会的行為の概念が限定されたものだとして論じている。Weber によって定義された「行為」とは、「行為する個人が、その主

観的な意味をそれに加える限りにおけるすべての人間の行動」というものである。「社会的な行為」の定義は「他者の行動に注意を払い、それによって、その道筋を指向する」というものである。そのとき、社会的な行為とは、他者の行動によって影響され、それを志向する主観的に意味ある行動なのである。いかなる研究においても、社会学者は、研究対象としている行為者の社会的な行為の主観的な意味を「理解」しようとしなければならない。もし、その研究者が、正しく適切に理解することができなければ、彼の理論と説明は、社会的な現実に対する虚偽の言明に基づくものとなり、科学的にほとんど意味を持たないものになってしまう。

Schutz は、社会的な現実に対するこの概念を問題として取り上げた。まず、Weber による「主観的な意味」の使い方は、ある行為が単一の意味しか持たないことを暗示するように思われるものであった。この意味は、行為を実行する行為者に起因する。Schutz は、このような物事の始め方では、解決できない問題を引き起こすだけだと信じていた。他方では、それは、社会的な世界を何かしら、個々のあらゆる個人によって主観的に理解されるものとして描き出すことになる。また他方では、それは、これらの主観的な理解が、何らかの形で、首尾よく実行されるという結果となる社会的な関係性と、社会的な相互行為に、十分に似ているものだとして想定しているように見える。Weber は、孤立した個人の世界を、個々の人々が、自分自身と他者の行為に対して主観的な理解を形成するものとして描いているように思われる。この Weber のような理解が、どのように調和しあって、私たちが住んでいる秩序ある共通の社会的な世界のようなものをじゅうぶんに作り出しているかについては、何の手がかりも提供し

ていない。

Schutz の見解では、Weber は、社会的な世界の相互主観的な性質を明らかにすることに決定的に失敗している。これによって、彼が言おうとしているのは、日常的な社会的生活が経験されるのは、それぞれの個人の意識を通してであるが、それは、それぞれの個人にとっての「秘私的」な世界ではない。社会的な世界は、行為者たちによって、共通で共有されたものとして経験される。日常的な社会的な世界の出来事は、まったく個人的なこととして経験されるわけではない。「私」にとって、それが持っている意味は、それらが「あなた」にとって持っている意味と、たまたま同じなのかもしれないし、異なるかもしれない。もし、そうだとしたら、そのとき、個人のあいだのコミュニケーションは、運任せということになる。それは、二人の人たちが、相手に分らない言葉でお互いに話しているようなものになる。その結果として、それぞれの人は、他の人がどんなことを言っているか、推量しなければならないことになる。それどころか、日常生活の共通の「対象」の性質は、社会的な行為者としての私たち全員にとって、当たり前のことと見なされている。社会的な行為者たちは、Schutz が、人間による過程をすべて社会に適合させる「常識による知識」と呼んでいるものを使って、このように日常的な世界を見る。

「常識による知識」という概念は、その世界に住み、その一部であるおかげで、社会的な行為者たちが手にする日常的な世界に対する知識にかかわるものである。Schutz に言わせると、社会的な世界は、社会的な行為者たちによって「所与の」世界として経験される。たとえば、組織化されていて、秩序があり「そこにある」ものである。そして、それは、いかなる個人からも独立し

て、それに先立って存在する。とはいえ、同時に、この世界は、私たちの特定の経験を通して解釈され、私たちのひとりひとりにとって意味あるものとされなければならない。私たちは、自分たちが持っている常識による知識を使うことによって、この世界を秩序ある組織されたものと見る。常識による知識は、私たちが、自分たちが経験する物事をカテゴリーに分類したり、名づけたりして、それらが「どのような種類のものか」を理解できるようにしてくれる。私たちの常識による知識を構成する概念は「類型化」である。すなわち、それは、対象や出来事や行為のコレクションの中で、類型化されたり、標準化されたりしていることにかかわる。類型化の過程によって、私たちはコレクションを構成するものとしての項目を、たとえば「木」とか「家族の口論」とか、「教師」や「約束」など「同種の物事」として見られるようになる。私たちの社会のメンバーとして、私たちは、日常的な世界を、なじみ深く、普通でありふれたものとして見られるようにしてくれる類型化のストックを処理している。さらに、これらの類型化は、私たち個人の考案したものではなく、私たちが他の人々と共有している言語の中に具現化されている。私たちに受け伝えられてきた言語を通して、すなわち、言語を介して、私たちは、この世界の物事に関する計りしれない知識のストックを身につける。このストックのちっぽけな断片は、私たち自身による直接の世界の観察に由来する。私たちは、世界について、間接的に一見聞や読むことによって、学ぶこともできる。世界に関する私たちの知識の大部分は、公式に利用できる知識である。誰でも知ることができ、知っておくべきことを構成している。

Schutz は、以下のように続けている：

もし私たちが手紙を郵便受けに投函したとすれば、私たちが想定することは、郵便配達人と呼ばれる匿名の同胞が、私たちには知られず観察することもできない、一連の操作を実行して、その受取人が、おそらく、私たちには、分らないこととして、そのメッセージを受け取り、私たちの知覚による観察を免れているような方法で反応するという効果を生む。そしてこの結果として、私たちは、自分が注文していた本を受け取ることになる。(Schutz 1967: 55)

この引用は、二つの根本的な論点を明らかにしている。ひとつ目は、それが、社会的な世界の相互主観的な性格を例証しているということである。それぞれの個人は、異なる個人的な経歴と、異なる経験や興味を持っている。だが、その個人は、それにもかかわらず、社会的な世界を「事実に基づく現実」として見ることができる。たとえば、対象や出来事や行為は、その個人にとっても他の行為者にとっても同じものなのである。たとえば、私たちが手紙として認識するものは、郵便配達人にとっても、同様に認識される。それによって、私たちがある本を依頼するために書いたことは、それが宛てられている出版社や書店によっても、そのようなものとして見るができる。

二つ目として、社会的な世界に対する私たちの理解は、個々の人に独自なものではない。このことを示すことによって、Schutz は、彼が「視界の相互性」と名付けたものの重要性を強調している。この概念によって、彼が言わんとしたことは、そうではないと信じる何らかの理由がない限り、社会的な行為者たちは、共通して、社会的な世界における出来事や行為を、それらが自分自身に理解できるのと同様に他者によっても理解でき

るものと想定しているということである。社会生活に関する Schutz の分析は、その結果、その中にいる個人によって経験されるものとしての、社会的な世界の構造や、その経験そのものがどのように社会的に構築され、組織されるかと関係している。

Schutz はさらに「多元的な現実」という概念を導入する。「世界」に関する構造と組織化に対する知識、あるいは日常生活の「現実」を夢の「現実」や空想の「現実」と対比している。ここで、とくに適切に関連しているのは、Schutz による日常生活の「現実」と、科学的な理論化による「現実」とあいだの比較である。

Schutz にとっては、常識による知識は、本質的に実際のなものである。それは、社会的な行為者によって、実際に生活し、その人たちが会おう日常的な状況と環境に対処することで得られ使われる。常識による行為者の目的は、科学者による目標とは異なり、標準化された対象の基準の何らかのセットによって評価される真実の追求ではない。むしろ、その行為者の目的は、いかなる状況においても、Schutz が「プロジェクト」と呼んでいるものを達成することである。行為者のプロジェクトとは、その行為によって、その人が引き起こしたいと願っている物事の状態である。これらのプロジェクトは、いくつかの種類の変因に左右される。まず、Schutz が「伝記的に決定された状況」と呼んでいるものがある。たとえば、その人の個人としての経歴の特徴である。二つ目として、何らかの特定の社会的な機会に関する特定の特徴がある。非常に明らかなものとして、その状況における他者の行為がある。三つ目として、社会的な世界の類型化に関する行為者の常識による知識や、そのストックがある。行為者のプロジェクトは、バスに乗るような差し迫ったことで

あるかもしれず、長期にわたる経歴上の野心であるかもしれない。だが、いずれのケースにせよ、それらは、その人の行為が自分自身にとって、そしてまた、他者にとって持ち得るかもしれない意味を構成している。とはいえ、他者もまた実際の行為者である。その人たちには、自分自身の実際的な関心と、動機づけと、環境がある。その人たちは、その行為をした行為者にとって、いくつかの行為がもたらす、すべての成り行きを理解することに関心を持つとは限らない。むしろ、その人たちは、その行為を、それらが、その人たち自身の実際的な目的に適切に関連するかという点から理解する。

とはいえ、科学者たちは、主として「今ここ」の特別な詳細に関係する知識に関心があるわけではない。この意味で、実際の行為者ではない。その代りに、その人は、自分自身の科学的なプロジェクトに関係する知識を追求する。そのようなプロジェクトの実現は、日常的な知識と基準に依存するものではなく、適切な科学的な手続きに関する、何らかの「客観化された」概念に依存する。その結果として、社会学者は、そのモデルと手続きが、「多元的な現実」の性質を理解し、科学的な推論が、日常の実践的な推論とはかなり異なるものであることを理解する。それによって、適切に修正されない限り、日常的な世界に、不穏で異質な「現実」を導入する可能性がある。たとえば、常識による行為者は、「政治家は信用できない」ということを知っている。このことを、必ずしも、どの政治家がどの程度にそうであるか、正確に知ることに関心を持たずに実際的な目的のためには十分なことと見なすかもしれない。とはいえ、社会学者は、自分の特殊な準拠枠から世界を観察して、たとえば、適格さや正確さや一般化に対して、それ自体のために関心を追

及する。このような関心は、「日常的な生活世界」の行為者たちには、ほとんど、あるいはまったく適切な関連性を持たない。

Schutz は、日常生活の「現実性」と科学的な理論のあいだのこのような違いが、社会学にとって特別な問題を引き起こすと信じている。自然科学とは異なり、社会科学や、とくに社会学は、「第2階の構成概念」を採用しなければならない。たとえば、それは、すでに常識による用語ですでに意味を持っている人間の行為と現象に対して、科学的な目的で、それらの現象や行為を構築したり、産出したりしなければならない。Schutz が主張したのは、もし社会学者たちが、科学的に有益な方法(たとえば、適切さと一般化できること等を可能にするような方法)で行為者の常識による理解を再現したいなら、社会学の概念は、それによって、行為者たちが社会的な行為を、たとえば「第1階の」とか、基本的な「階にある」概念を理解できるような概念に関係するものでなければならないということである。

最後になるが、Schutz は「社会生活の現象学」のための基盤を構築したものと見ることができる。だが、彼の考え方がどのように社会的な世界の経験的な研究に応用することができるかを例証する研究を産出して、それを運用可能にするという点では、彼自身が行ったことはほとんどない。エスノメソドロロジーの発展に見られるように、彼の考え方をさらに取り上げようと試みてきた。Schutz は、また、のちの社会学者たちが、別の方向性に向かう影響を与えてきた。次のセクションで、私たちは、エスノメソドロロジーの性格を記述する。だが、私たちの主な関心を再開する前に、エスノメソドロロジーとは異なる指向をもった、そのような研究を例証しておくことにする。

Berger と Luckmann：知識社会学を再考する

「知識社会学」とは、知識と信条に関する項目やシステムの社会的な基盤に関する研究である。「知識社会学」という用語は、Karl Mannheim によって、1930年代に広まったものである。たとえば、Marx の「イデオロギー」とか、Durkheim の「集合意識」といった創始者の研究に社会に由来する知識のシステムを説明しようとする試みである。Schutz の研究の知識社会学への関心に対する適切な関連性が、最も明らかに述べられているのは、Peter Berger と Thomas Luckmann の著書の『日常生活の構成 (The Social Construction of Reality)』である。Berger と Luckmann が指摘したことは、この分野が、ある社会のメンバーが、お決まりの日常生活で採用し、表している知識よりも、むしろ、ほとんど独占的に、政治的なイデオロギーや宗教的な信条のシステムや倫理的な改革運動などの現象の研究にかかわってきたということである。その結果として、「知識」を単に、多くの社会的な特徴や変数のひとつとして考える傾向が続いてきた。たとえば、魔法に関わるある社会的な集団の信条の総意の考え方が、社会構造の「問題」（緊張や葛藤）が、魔法の実践が社会システムの内部で構成的に機能している方法によって解決されているという観点から説明される。とはいえ、Berger と Luckmann にとっては、「知識社会学」（広い意味で「現象が実際にあるもので、それが特定の特性を持っているという確信」として定義されたものは、社会生活において、非常に普及性があり、構成的なものであり、このような方法で扱われるべきではない。その代わりに彼らが主張したことは、「知識社会学は、それ自身を、社会において『知識』として通用するあらゆることに関係づけなければならない

い」ということである。結果として、知識の社会学は、もはや、たんに社会的な関心の特定の領域や側面に関するものではなく、社会生活のすべての研究に適切に関連しているものとなったのである。彼らは次のように続けている。

知識社会学は、まず、人々が日常生活、すなわち理論上の生活でもなく、理論以前の生活において「現実」として「知っている」ことに、それ自体を関係づけなければならない。言い換えれば、「考え方」よりむしろ常識による「知識」のほうに、知識社会学の中心となるべきである。それなしには社会が存在しえないのは、意味の組織を構成する、まさに、この「知識」なのである。(Berger and Luckmann, p. 27)

彼らは、「常識による知識」の性質の概念とその社会学に対する重要性が、Alfred Schutz から直接に由来するものであると認めている。本書の一部は、事実上、広範囲にわたって記述されている Schutz の研究に対する優れた紹介になっている。彼らは、知識社会学という概念を Schutz の研究に由来するものと見ている。彼らの主要な目的は、どのように、それを社会学理論全般に対して統合するのかということである。ここで彼らが利用しているのは、Marx, Durkheim, Weber, Mead などの重要人物たちの研究である。『日常生活の構成』は、「常識による知識」に対する関心と社会的なリアリティの相互主観的な性質が、Schutz によって要点を説明されたように、どのようにして、既存の社会的な関心とお互いに調和することができるかを示そうと試みている。Schutz は、他方では、私たちが見てきたように、彼の研究を、社会的な思考における社会生活の既存の概念に対する革新的な始まりを構

成するものと見なしていた。

Harold Garfinkel：エスノメソドロロジーの概念的な枠組み

「エスノメソドロロジーとは何か？」は、1967年に出版された Harold Garfinkel の著書、『エスノメソドロロジーの諸研究(Studies in Ethnomethodology)』の最初の章のタイトルである。それは、多くの社会学者たちが、これまで書かれた社会学に関する最も難解な本のひとつとして見なした本のなかでも最も難解な章のひとつである。この難解さの理由には、二つの要素がある。ひとつ目は、Garfinkel の考えが、他の社会学的な取り組みで見られるものとは根本的に異なる、非常に複雑なものだということである。二つ目は、そのような考え方を表現するのに必要な言語そのものが複雑なものであり、ときには、なじみのないものだという事である。ここで、私たちは、Garfinkel の考え方を、できるだけ簡単に、だが詳しく説明してみることにしよう。私たちは、エスノメソドロロジーをある取り組みとして自分たちの解説を組織する4つの基本的な概念を確認してきた。

メンバーの方法

Garfinkel は、日常生活のなじみ深い出来事やありふれた場面が、認識可能で、平凡なこととなるのは、メンバーが、これらの出来事や場面を、現にそれらがあるものとして産出したり、認識したりする方法のおかげであると提唱している。

より簡単に言えば、彼は、私たちの社会のメンバーとしての日常生活の出来事が、私たちにとって意味をなすのは、私たちが、同時に、それらを産出したり、認識したりしているためだと提唱している。(ここで、Garfinkel は、Schutz の「行

為者」という用語を「メンバー」という用語に置き換えている。私たちは、この置き換えの重要性を、以下の「成員性 (membership)」において議論している)。私たちは、自分たちの行為を産み出す際に、これらの行為の性質が、他のメンバーにも利用可能になるような方法をとっている。社会的な行為を、たとえば、「苦情」とか「講義」とか「ジョーク」などとして産み出すとき、私たちは、他の人たちにも問題なく利用できるようにする方法で、それらを達成している。「質問」や「嘘」や、単なる「話をする順番」のようなことを認識する際にも、私たちは、自分たちの社会的な世界を、当たり前と見なされ、お決まりで、標準化された方法で産出している。何が起きているかは、関係者全員にとって「明らか」なことである。とはいえ、日常的な出来事の、この、お決まりで、問題のない馴染み深い特徴は、私たちの側の意味をとる作業による産出なのである。この意味をとる作業をするためのメンバーの方法を通して、私たちは、共通の社会的な世界を達成する。それらを通して、私たちは、他の人たちが、私たちがしているのは、どのようなことなのか、たとえば、「講義をしたり」、「質問をしたり」、「約束をしたり」(もしくは、その三つ全部を同時にしさえするかもしれない。たとえば、「もし私がエスノメソドロロジーについて来週、話すと、請け合えば、それであなたたちの試験に関する心配を落ち着かせることになるかね?」と言うことによって)理解することを確かに行うことなのである。もちろん、Garfinkel は、日常的な社会的世界において、誤解や不賛成や、理解しそこねることが起これないということを提唱したわけではない。同一で意味をとる作業、たとえば、同じメンバーの方法を使うことによって、その人たちが何について話しているのかわからない

とか、話していることに同意しないとか、私たちにしてもらいたがっていることが分らないとか、私たちがなぜ、その人たちの気持ちを害したのか分らないとかを他の人たちに対して明らかにすることができる。そして、私たちの意味をとる作業を通して、私たちがその人たちから聞くのは、その人たちが何について話しているかとか、実は私たちにしてほしいと思っていることや、あるいは、私たちが人を怒らせるようなことをいったのがどのようなことか、という返答なのである。要するに、Garfinkel は、メンバーが、社会的な世界を成し遂げたり、達成したりしなければならないということを提唱している。その人たちがそうするのは、当たり前と見なされ、暗黙のうちに認められ、分析もされていないメンバーの方法によっている。エスノメソドロジストたちは、自分の課題を、これらの「メンバー」の方法がどのように見えるのかを明らかにして、詳細に説明することだと見なしている。

文脈依存性

Garfinkel が提唱しているのは、メンバーの行為と発話が、それらが用いられている社会的に組織された場 (setting) の特徴であるということである。したがって、それらの意味は、それらが産出され、認識される場に対して「文脈依存的」なのである。

この「文脈依存性」という概念によって、Garfinkel は、日常的な社会的状況のその場ごとの性格に注意を引こうとしている。彼の強調点は、個々の日常的で社会的な事象、機会や出来事の特別な性質に置かれている。

たとえば、言葉は、いつでもそれが使われるすべての機会に変わらない意味を持つわけではない。言葉が、特定の機会に、その場で意味するこ

とは、メンバーの側で分析の作業を当たり前に行う必要がある。同様に、機会のその場ごとの性質や、それが何であり、何を意味するか、ということも、不明瞭ではなく、「文脈」によって反映されたものとなる。文脈や機会がどのようなものであるかという意味の代わりに、それは、それに関係しているメンバーによって達成されなければならない。

このようにメンバーは、文脈依存性を「修復」しなければならない。自分たちがしていることがどのようなことなのか、その意味を理解することによって、「見せかけ」や「論争」や「ミーティング」や、その他すべてを産出し、それによって、多くの状況や、何らかの社会的な出会いの詳細を記述するすべての可能な方法を要約する。その人たちは、それを何が「起こったのか」に関するその人たちの認識を供給する「限定された」記述として要約する。

Garfinkel が、さらに進んで提唱することは、メンバーだけではなく、社会学者もまた一実のところ誰でも一同じ方法で立ち働いているということである。その人たちは、自分たちのメンバーの方法を用いて、重要性を持っていることを「ドキュメントによる証拠」と、その人たちがそれを理解したものとして、何が起きているかを、この「簡潔にした表現」という方法で記述する。まさにこうした方法で、メンバーなら—だれでも—社会的な世界についての、「客観的」、すなわち、一般的な言明を引き出すことができる。これらの言明や、これらの記述は、たとえば、「いかなる状況」に固有なものでも、本来備わっているものでもない。その代りに、それらは、メンバーの方法を用いて構築され、達成され、その特別な機会に対する、その場のその人たちの認識を産み出す。

相互反映性

Garfinkel が提唱しているのは、社会的な世界は、メンバーによって事実的な秩序として経験されるということである。なぜなら、その秩序が産出され、認識される、意味をとるという作業そのものはメンバーの探求のトピックではないからである。

ここで Garfinkel が言っているのは、彼が実践的な行為の「相互反映性」と呼んでいるものである。私たちが「文脈依存性」という概念との関連で見てきたところでは、メンバーの意味をとる作業は、社会的な行為の「文脈」の特別な特徴に対する注意を必要とする。社会的な行為は、この「文脈」に「おいて」産出されるのが見られるものである。だが、この「文脈」は、決してそれ自体が、メンバーの意味をとる作業の所産として与えられるものではない。それというのも「文脈」とは、メンバーが、自分たちに、その出来事がいかなるものであるかという意味を与えることを選ぶ社会的な出来事の機会の状況そのものに関するものだからである。これは、類義語の無用な反復（たとえば、循環性の議論）のように聞こえる。だが、それは故意のものなのである。Garfinkel が述べているのは、メンバーは、社会的な出来事の状況を、これらの出来事がどのようなものであるかに関するその人たちの記述から切り離しはしないということである。これらの状況と、私たちが、出来事を記述するために、それらの概要を与える方法とは切り離せない。すなわち、状況と記述は「相互に構成的」なものである。記述または説明に「おける」状況の統合的な埋め込みと、社会的な出来事と社会的なアレンジに関する状況に「おける」説明や記述は、Garfinkel が相互反映性という言葉で意味しているものである。

このように、日常的なアレンジをするメンバー

は、これらのアレンジの特徴を目に見えるようにするものとして使うことができる。これらの同一のアレンジを生じさせることができる。たとえば、その人たちは、何が起きているかに関するその人たちの認識を説明可能で記述可能なものにする。その人たちがそうするのは、メンバーの方法によって、その人たちの社会的なモデルをお互いに記述可能（もしくは、一目でそれと分かるように説明可能）なものにするためなのである。

とはいえ、メンバーは、これらの方法を当たり前と見なしており、検討されていない方法で用いている。その人たちによって、社会的な世界は、「そこにあり」、「所与のものであり」、「客観的」なものである。それは、標準的に利用できるメンバーの方法を使った結果の所産として見られてはいない。

これらの方法を詳細に記述するのが、エスノメソドロジストたちの課題である。明らかに、彼が自分自身の議論で出会わずにいられない厳密な方法論上の困難は、彼自身が、解明して検討したいと願っているメンバーの方法そのものを必然的に使わざるを得ないという事実にある。私たちは、簡単に、どのように彼が、この問題に対処しようと試みるかを見ておくことになるだろう。

成員性 (membership)

これまで、Garfinkel の考えに関する私たちの要約で、私たちは、何度も「メンバー」という概念に触れてきた。Garfinkel が、Schutz の「行為者」という用語の代わりに、「メンバー」を使ったのは意図的である。というのも、Garfinkel にとっては「メンバー」は、特定の認識を持つ者だからである。それは、人々が、他の人たちも共有していると信じている、社会的な世界に関する常識による知識の共通のストックに言及するもので

ある。「成員性＝メンバーシップ」という概念は、社会的な行為に関する根本的なエスノメソドロジーの主張に由来している。メンバーは、社会的な世界が、誰によっても、同じように見られ、経験されるものとして想定している。もし、誰かが、それを、他の人たちが見るのと同じように見ていないように思われるとしても、メンバーが、直ちに、社会的な世界に対する自分の認識を疑うことはない。むしろ、メンバーは、その人がどこかしら「間違っている」として批判的に見ることになる。メンバーは、なぜ、その人にとっては、「誰にとっても明白にそこにある」ものを見てとることができないのか、その理由を探すだろう。典型的に用いられる人材は、そのようなことが起こる人は、「子供」であったり、「外国人」であったり、「その瞬間に何かで頭がいっぱいだったりする人」などである。これは、そのような情報が、必ずしも「不完全な」振る舞いをする人であることを示しているわけではない。むしろ、これらの説明は、特定の機会の必要要件を満たすために、即興で、その場で構築されるものである。

「成員性」という概念が呼び起こすのは、「文化」に関する伝統的で、社会学的な概念である。そこでは、それは、ある特定の社会の「だれかしら」が、自分たちの社会的な世界について知っているべきことを構成している概念や信条の組み合わせに言及する。だが、それは「文化」という概念の範囲を越えている。それは、これらの概念や信条が、他の人々が、特定の機会に適切なものとして見るができるような方法で、その人によって使われており、そうでなければならぬことを強調しているという点である。私たちの成員性は、私たちが物事の状態を同じ事実在即したのものとして認識していることを、他の人たちに示すような行動を産み出すことによって、私たちが日

常生活において絶えず例証し続けるようなものである。

想像による例

私たちは、Garfinkelの概念的な枠組みを、以下の想像上の例で例証することにする。

AとBが職場の廊下で出会う。そこでの会話である。

(A) 'Hi'

(B) 'Hi'

(A) 'Do you know what John's doing?'

(B) 'No'

このありふれたちょっとしたやりとりは、Garfinkelの概念を例証する役に立つ。まず、Aの質問を見て、その質問が、どのように理にかなった答えを得ているかをみることにしよう。最初の問題は、聞き手にとって、それが起こさせる可能性があることで、それがどのような種類の質問かということである。少しだけ、自分自身をBの立場に身を置くとしよう。私たちは、それが、直接に自分に向けられた質問として聞くかもしれない。だが、話し手は、聞き手の知らないことを聞き手が知っているかもしれないという希望が期待のもとで尋ねているのではないだろうか。もしくは、それは、私たちが答えを知っているはずの質問で、事実として、私たちが知っているとするれば、聞き手は、それを知っているのだろうか（もちろん、これらの二つの他にも、他のタイプの質問もある）。その解決策は、Johnがどのような人物であるか、AとBがどのような人物であるかに左右される。その人たちのあいだにどのような種類の社会関係が保たれているかに大きく左右される。このように、たとえば、AがBの上司であるとしたり、Johnは、Bの厳格な監督下にあ

ると想定される新しい見習いの若者である場合には、Aの質問は、二つ目の種類の「テスト」の質問であるかもしれない。ことによると、AはJohnが、すべきでないことをしたことを知っていて、Bを、その弛みゆえに叱責するにいたったのかもしれない。別の可能性として、もしJohnが、Bがいかなる意味でも責任を持つ人物ではないとしたら、その場合には、Aの質問は単純に情報を求めているのかもしれない。とはいえ、それは三番目の種類の質問である可能性もある。人が話を語る手はずをととのえるのに用いているのかもしれない。たとえば、Aは、Johnに関して語りたいと思っている何らかの話を持っているのかもしれない。彼の質問は、Bがすでに、その話を知っているかどうか確認する方法であり、それによって、その件でJohnについて語るための会話の次のターンを得るためのものかもしれない。

これらの可能性のすべて(と、読者自身が想像できる他の可能性)は、Aの質問がBに対して持ち得るかもしれない意味である。Bが与えるかもしれない返答の種類が重要であるかもしれない意味である。これらにさらに含まれている問題は、言及されている「John」は、何者であるかなどではないだろうか。そしてまた、この事例における「している (doing)」の意味は、どのようなものだろうか。人々は、文字通りの正しい意味で、多くのことを「している」が、そのすべてが、「Xは何をしているか」という質問に対する回答として適切であるとは限らない。たとえば、私たちは、この質問に対して、「彼は息をしている」ということによって、正確に答えることもできる。とはいえ、私たちが予測するところでは、ここでは、こうした種類の回答は、たとえ、本当のことであるにせよ、冗談か素っ気ない拒絶として

しか聞かれまいだろう(たとえそうだととしても、私たちに想像しうる状況は、Johnに活力が欠けていることについての知覚的なコメントとして、それを表現するものでしかありえない)。

このように、質問に答えるという、一見して単純な物事でさえ、かなり複雑な意味をとる活動を含んでいる。とはいえ、この意味をとる活動は、単純に聞き手に限定されるものではない。質問をした人としても、私たちは、質問を宛てた人物が、私たちが必要とするような種類の回答を産み出すことができるような方法で質問を産み出すための、意味をとる活動に従事している。したがって、私たちは、再び、私たちのやり取りに戻りそれを見返して、Aの観点からは、どのように、その質問が賢明に質問されたかを問うことができる。ここで決定的な論点は、メンバーが、その人たちの意味をとる、その人たちの行動として表すことである。このように、Aはその立場から、そして、Bは、彼の返答から、他の人々に対しても意味をなすものとして意図されたトークを利用可能なものとする。そのトークは、このように、それを産出した意味をとる活動として分析することができる。

この短い実例が、Garfinkelの基本的な概念を例証してくれたことを望む。私たちは、その人たちのトークにより、またそれを通して、どのようにメンバーが社会的な行為を実行し、それによって社会的な事件や機会を構成するかを見ることができる。メンバーは、現在も進行中のその人たち自身のトークの分析を通して、いま、ここでの、この機会のために、それから特定の意味を作り出すために、トークの文脈依存性を「修復」することができる。Garfinkelは、Schutzと同様に、出来事の意味をとることがメンバーにとって実践的な問題であることを強調している。メンバーに

は、その人たちの社会的な背景と社会的な相互行為によって、お互いに、何が起きているのか、あるいは、そこでは次に何が起きるのか、通常は、厳密には知らないことや、他の人たちが次に何を話すつもりでいるかとか、自分たちが厳密には何を言ったり、したりしようとしているかを理解できるものとする必要がある。とはいえ、相互行為の、この「偶発性」は、必ずしもメンバーにとって心配事を生み出すものではない。というのも、メンバーは、通常、それが起こり、あるがままの社会的世界に対処できるからである。もし私たちが、メンバーとして、出来事に当惑したり、混乱したりするとしたら、そのとき、私たちは、しばしば、待機して、物事が私たちに明らかにされるかどうかを見るために、次に何が起こるかを見届ける。このように、現在の出来事の分析は、ちょうど、過去の出来事が、いまでは、現在の出来事を明らかにするのと同様に、メンバーに何らかの過去の出来事に対する認識を供給してくれる。Garfinkel は、この能力をメンバーの「出来事に対する遡及的、予期的な認識」と呼んでおり、私たちは、彼の経験的な研究を議論するときに、まもなく、それに舞いもどることになるだろう。

Garfinkel：経験的な例証

私たちは、ここで、日常的な社会的な世界とメンバーによるそれを構成する方法の性質を明らかにすることを意図した Garfinkel の経験的な例証のいくつかを検討することにする。

社会秩序を混乱させる

日常生活の秩序の「目に入っているが気づかれない」ことが達成されていることを例証するために、Garfinkel は、学生たちの何人かに、当たり前のことと見なされているお決まりの手順となじ

み深い性質を混乱させるような実験を依頼した。

学生たちは、自分たちを、その人たち自身の社会の「よそ者」として見るように命じられ、それによって、その人たちの当り前にしている常識による理解を保留するようにされた。ここに、Garfinkel による『エスノメソドロロジーについての諸研究』(pp.42ff)から引用した二つのレポートの実例を挙げる。

1.

(S) Hi, Ray. How is your girlfriend feeling?

(E) What do you mean? 'How is she feeling?' Do you mean physical or mental?

(S) I mean how is she feeling? What's the matter with you? (He looked peeved.)

(E) Nothing. Just explain a little clear what do you mean?

(S) Skip it. How are your Med School applications coming?

(E) What do you mean, 'How are they?'

(S) You know what I mean.

2. The victim waved his hand cheerily.

(S) How are you?

(E) How am I in regard to what? My health, my finances, my schoolwork, my peace of mind, my...?

(S) (Red in the face and suddenly out of control) Look! I was just trying to be polite. Frankly, I don't give a damn how you are.

もうひとつのケースでは、学生たちが求められたのは、15分から1時間ほどその人たち自身の家で、自分たちが下宿人であるかのような「ふりをする」ことだった。その人たちは、下宿人が行動するように、礼儀正しく、個人的な挨拶を避

け、堅苦しいあいさつの言葉などを用いるよう命じられた。一部の学生たちは拒否した。また他の学生たちには、単純にそうすることができなかった。残りの学生たちについては、その実験またはデモンストレーションの結果は、非常に顕著なものであった。概して、家族のメンバーは、仰天し、当惑し、心配し、まごつき、あるいは怒った。それらの学生たちは、しばしば、卑劣とか、軽率とか、不快とか、無礼とか非難され、病気ではないかと想定された例もある。

Garfinkel が提唱したことは、これらの「実験」が、日常生活において、メンバーが、他のメンバーが、その人たちが実際に話していることを予期し、他のメンバーが、場合による表現や振る舞いを使うことを予期し、言及の特別な曖昧さを理解し、現在起こっていることに関して、遡及的、予期的な認識を作り出すことである等であることを例証しているということである。メンバーは、いつも決まって、「明らかに起きている」ことを認識するさいの相互行為の、目に入っているが気づかれない特徴を供給している。適格な成員性は、世界を誰もが知っているものとして認識したり、そのようなものにするに於いて、絶えず表わされている。

さらに、これらの例証は、なじみ深い社会的な世界の倫理的な性質も示している。自分の適格な能力を表すのではなく、秩序を乱すことは「悩まされて」きた他のメンバーからの倫理的な制裁をもたらすこともありうる。社会生活の秩序性は、メンバーがお互いに持ち、示しあう相互の信頼に基づいている。「十分な理由」もなしに、トラブルを産み出すことは、その信頼を壊し、通常、怒りや非難を買う結果となる。たとえば、例の学生たちが何をしていたか、なぜその人たちが、そのように奇妙な振る舞いをしたかを犠牲者たちに説

明したとき、それによって、「十分な理由」が供給され、信頼を回復することができた。未来の混乱は、「馬鹿げた社会学的な実験」を参照することによって説明されることになるかもしれない。たとえそうでも、いくつかのケースでは、この説明が通常の状況を混乱させることによって産出された騒ぎを適切に説明することとして受け入れられないこともあった。

活動中の陪審員たち

Garfinkel が、エスノメソドロジー(エスノ=人々、したがって、エスノメソドロジーとは、人々の方法である)という用語そのものを作り出したのは、活動中の陪審員たちを研究していたことである。彼は、陪審員たちが社会の普通のメンバーであり、割り当てられた課題に取り掛かろうとしていて、その人たちの社会的な環境に関する分析や、出来事を意味の解釈や、方法的な仕方ではどのように行なうのかについて決定するさまを見ることができるという事実に関心を打たれた。陪審員たちは、その人たちの審議において使い、他の人々にも使うことを要求したのは、自分たちの社会に関する知識である。それは、「事実」とか「意見」、「誤り」や「起こったはずのこと」や「目撃者がその供述で言わんとしていること」や「証拠が示唆していること」などや、その人たちの審議を構成するその他のすべての現象を産出し、認識し、記述するためである。その人たちがこれらのことをするために使った知識とは、それを知識として使う以前には、知識としてのその地位を評価するための個々のあらゆる機会にその使い方をその人たちが検討した知識ではない。むしろ、その知識としての地位は、当たり前と見なされている。すなわち、それは、むしろ、社会について「誰もが知っていること」である。この知識

の使用を通して、陪審員たちは、その人たち自身と他の人々に「理にかなっており」、「公平」で「偏らない」ものとして、見られる判決に達することができる。陪審員たちは、実践的な要求事項やそれらの状況に対処するものとして、その人たちの常識による知識を方法的に使った。さらに、そうすることにより、その人たちは、同時に、その人たちの状況の実践的な必要要件となることを構成していた。「事実」や「意見」などを、方法的に産み出し、認識し、記述し、「このケースに適切に関連している」物事を、そうではない物事と区別することによって、陪審員たちは、継続的に「自分たちが何のためにここにいるか」に対する指向を例証し、陪審員たちが、この指向を陪審団の部屋の会話に貢献するものとして表現することを必要とした。

このように、陪審員たちに関する分析で、Garfinkel は、社会的な状況や背景や構造は「そこにある」ものではなく、いかなる瞬間にも、いかなる人物の振る舞いからも独立したものであることを例証している。すなわち、それらは、メンバーによって、方法的なやり方で達成される。「陪審員であることの責任」や「陪審員であることの問題」や「陪審の手続きの規則」などについて話すさいには、メンバーは、この背景をもたらしたトークそのものにおいて、「陪審員」という社会的な現象の性質そのものを構成している。簡潔に言えば、メンバーはその人たちの常識による知識を使い、その人たちがしていることの組織化された特徴を目に見えるものとする、社会的なアレンジの特徴を達成するために、当たり前と見なされている実践的な推論という方法を使った。

職場での検屍官

検屍官たちと自殺の調査員たちは、自殺防止セ

ンター (S.P.C) のために働いている。その人たちも、陪審たちと問題と類似した問題に直面する。それというもの、その人たちは、自分たちの調査の結果として、その人たちが調査した死に関する法律的な地位に関する決定を産出しなければならないからである。この決定は、公にされ、それが「状況」において「妥当な」「筋の通った」ものか、他者による判断や評価にさらされる。したがって、検屍官たちは、もしオフィスに留まりたいと思うならば、その人が検討した、それぞれの特定のケースに対する最も適切な決定を産出したものと見られる努力をしなければならない。

検屍官にとっての主要な問題は、Garfinkel によって以下のように定式化されている。故人の遺体と、その遺体の物理的な場所と配置や、遺体の周辺に見つかった物体や、故人の親戚や友人や知己や、ときには知らない人たちから収集した情報を提示されて一言い換えれば「証拠」となりうるすべての事柄を提示されて一個人の遺体が、そのような最終結果に至ったことを産み出す、出来事の道筋を認識できる程度に合理的な説明として構成しなければならない。証拠に対する何らかの説明が、代替する説明、すなわち、検屍官の説明を「不適切」とか「偏っている」とする主張に抗する唯一の方法は、単純に、それを「明らか」で「十分」で「妥当」で「偏っていない」すなわち、「誰でもが理解できること」として訴求することである。「さらに多くのこと」が発見できる可能性があるという主張に対して、検屍官が提供できる唯一の解答は、現在の証拠を違った角度で提示することであり、いかなる量の調査にも、依然として、「それ以上」の問題の余地があることを言うことに過ぎない。彼にできるすべてのことは、彼の検屍官としての課題の実践的な状況に訴えることである。これらの実践的な状況とは、利用可

能な証拠から「いかなる分別がある人物でも推定すること」に基づいて、その決定を下すことを必要とする制限事項である。結果として、検屍官たちは、陪審員たちと同様に、「あらゆる実践的な目的のために」決定を下す。以下は、Garfinkel自身の言葉である。

観察医（と S.P.C）が、それぞれの特別なケースに関して、これを求めるのは、それによって、実践的な決定可能性を達成するその人たちの仕事、ほとんど不可避免的に、以下の偏在する重要な特徴を表すからであるように思われる。S.P.Cの職員たちは、「this/これ」に対する決定可能性を達成しなければならない。すなわち、その人たちは、どのようなものであれ、「この」多量のもの、「この」視野、「この」記録、手持ちのもの、「この」コレクションから始めなければならない。そして、何であれそこにあるものは、何であれそこにあるものが役に立つだろうというだけでなく、実際に役に立つという意味で、それなりに間に合う。人は何であれそこにあるものを役立つものとする。私は「やりくりする」という表現によって、S.P.C.の調査者が、あまりにも安易に満足しているというつもりはない。また、彼がそうすべき場合に、それ以上のことを探さないというつもりもない。その代りとして、私が言いたいのは、彼が対処しなければならないのがどのようなことであれ、それは、産出されたその事態を見出し、決定可能なものとし、その産出のために社会が運営された方法で、その状況を最終結果とすることにするために、使われてきたものだという事である。この方法で、遺体安置台に残るものは、前例として役立つだけでなく、S.P.C.の調査の目標として役立つ。（Garfinkel p.18）

Garfinkel：要約

明らかに、Garfinkelの考えの多くは、Schutzの研究に由来する。たとえば、社会的な世界の相互主観的な性質や常識による知識の性質や社会的な行為者の実践的な指向などである。Garfinkelは、たんに、これらの考えを言い直しただけではなく、彼はさらに進んで、社会学の主題となる事柄の性格について理論的な概念を産出し、それによって、経験的な研究が可能になるような基礎を提供した。研究に対するこの枠組みが中心としているのは、「文脈依存性」や「相互反映性」や、とりわけ「メンバーの方法」という概念である。Garfinkelが主張しているのは、経験的な研究の主要な主題は、メンバーが、社会生活の偶発的で、機会に即した出来事を、産み出したり、認識したりする方法によるべきであり、それによって、それらの出来事が、馴染み深い明らかで標準的な外観を表すものとして見られるような方法であるべきだということである。日常的な世界を研究したいと願う社会学者たちに対するGarfinkelが推薦することは以下のようなことである。すなわち、自分のまわりのいたるところを見まわせば、普通の人々がその人たちの日常的なビジネスを、馴染み深く、注意を引かない活動として実行しているところが見られる。このありふれた事実こそ、社会的な世界の要点そのものなのである。メンバーが首尾よく他者と協調して実践的な活動を実行する能力こそが、社会的な世界を可能にしている。したがって、これらの実践的な行為をとりあげて、それらがどのように達成されるのかを検討することである。あなたは、そこに含まれている方法が複雑で洗練されたものであり、しかも、ほとんど誰もが身につけている（そして身につけることを要求される）ものであることを見出すことだろう。

Aaron Cicourel：エスノメソドロジーと「既存」の社会学

1964年に、Cicourelは、『社会学の測定と方法(Methodology and Measurement in Sociology)』という本を出版した。それは、Schutzの研究と、当時は、大部分がまだ出版されていなかったGarfinkelの研究から影響を受けた考え方を基礎として、既存の社会学の研究の形態を評価しようと試みるものであった。それは、特に、エスノメソドロジーというプログラムを詳細に説明するものではなかった。実際に、このとき、Cicourelは、そのようなプログラムがどのように見えるものか詳細には理解していなかった。むしろ、それが提示したのは、当時、現われつつあったエスノメソドロジー的な見地からの、既存の社会学的方法に対する革新的な批判だった。

彼が議論していることは、すべての形態の社会学的研究に、観察または「データ」に秩序を押し付けるプロセスが含まれるということである。最も簡単なレベルでは、この秩序づけは、共通の特徴に基づいて、出来事や人物を「タイプ」に分類することである。より洗練されたレベルでは、社会学者たちは、その人たちが、出来事や人物が持っている特定の属性を比較できるように(たとえば、「権威主義」や「民族的な偏見」)、これらの特徴のある種の標準的な編成単位の観点から評価したがっていることである。事実として、大部分の社会学的研究には、何らかの種類の評価が含まれている。私たちが「セット」を他のものと差別化する—たとえば「学生」を「教師」と区別する—「単刀直入な」分類でさえ、同一性と差異性の基準を必要とする。これらの基準は、すべての評価システムに対して用いられなければならない。すなわち、評価システムはそれらの洗練度において異なり、基本的には、より複雑で、付

加的な基準を含む観点から成り立つ。したがって、私たちは、社会的な世界を「評価する」ことを含む問題を見るために、より強力でより複雑な評価システム—私たちに、データに対する複雑な統計的な操作を実行することを可能にするシステム—を調べる必要はない。それというものの、単純に対象や出来事を分類することが、私たちを評価という問題に巻き込むからである。

Cicourelの見解では、何らかのレベルの評価システムを使うことにより、社会学者たちは、必然的に、自分たちの常識による知識を利用している。社会学者たちは、社会的な世界における出来事や人物を「これ」とか「あれ」として知覚する。その方法は、普通の社会のメンバーと厳密に同じ方法を用いている。この点では、社会学者たちは、ちょうど普通の人々が自分たちの常識による知識を検討されない方法で使っているのと同じように活動している。他の誰もと同様に、社会学者たちは、社会的な世界の特徴が「外側に誰もが見られるものとして」あることを、当たり前のことと見なしている。社会学的研究者たちは、何よりもまず、自分たちの社会のメンバーであり、社会のいかなるメンバーも持っているのと同じ種類の、相互行為的な技量と常識による知識を持っている。重要なことに、この社会の成員性には、日常言語の熟達が含まれている。経験が認識されて、意味あるものとして記述されるのは、言語を通してである。Cicourelはそう言う。共通の理解が達成されるのは、状況に即した相互行為的な言語の使用(たとえば、Garfinkelが「文脈依存性の修復」と呼んでいるもの)を通してである。調査者は、他のいかなるメンバーとも同様に、メンバーとして、社会的な現象の日常的な意味を知覚する自分の能力に依存している。彼は、まさにこの方法によって、出来事や人物や関係性を分類し

て、それらを社会学的な概念の見地から作り直すことができる。したがって、社会学者ではない人たちからしばしば寄せられる不満は、大部分の社会学者たちの研究が「自分たちがすでに知っていることが専門的な業界用語で表現されている」ということである。Cicourel の議論によれば、必然的に、人間の行為に関する、そのような「社会学的な」説明は常識による知識と両立できる。なぜなら、Schutz が強調したように、日常生活の常識による知識は、社会的な世界が経験される見地からは「至高の現実」だからである。さらに、社会学者たちは、「もっともらしい」発見を産み出す。だが、それは、彼が、いかなる調査の断片にも含まれる実践的な事柄に関して決めるために常識による知識を用いたからである。社会学者たちは、以下のような問題を解決するために、常識による知識を使う。たとえば、どのような種類のトピックが「慎重に扱うべき」で、注意深い質問が要求されるか。どのような種類のトピックが「安全」で、素早く処理できるか。どのような種類の「テスト要因」が、二つの変数のあいだの相関関係を説明するか。状況に社会学者が同席することが、参与者たちの行動にあまり影響を与えないことを確実にするには、どのような方法をとるのが最善であるか。どのような種類の公式の情報が最も正確で偏らないデータを提供してくれるか。こういったことである。これらの問題すべて、そしてさらに多くの問題が、社会学的な調査で扱われるような種類の問題である。それらは、最後の分析においては、社会学者たち(および、ほかの「誰でもが」)共通の認識として真実だと「知っている」ことにかかっている。

Cicourel は、このテーマを、社会学的な調査の主な形態を順番に検討することによって追及した(それらは、参与者に対する観察、インタビュー、

質問表による方法、実験、そして、書かれた書類の内容分析である)。彼の主張は、これらの方式すべてで、常識による推論と、相互行為的な技量が、研究の対象となっている社会生活の側面に対する説明を社会学者が構築するための検討されていないリソースとなっているということである。したがって、この点では、社会学的な説明とは、同じトピックに対する他のメンバーの説明と何ら変わるものではない。調査に対する実質的な取り組み—そこでは、調査者が社会のある側面やある特定の社会的な集団やカテゴリーを、その側面が秩序だっていることを社会学的なバージョンとして産み出すための調査のトピックとして選ぶのであるが—をする代わりに、社会学者たちは、社会のメンバー(社会学者も含む)が、その人たちの世界の秩序と構造を産み出す方法とその過程を調査すべきである。このように、Cicourel が提唱しているのは、私たちは、通常、社会学者たちがその人たちの仕事のリソースとして当たり前と見なしていることから、トピック(たとえば問題)を作り出すということである。私たちは、メンバー(社会学者も含む)が、どちらも社会生活を特徴づけ、構成している、共有された意味と集団的な行動を産み出すのに使っている、当たり前とされ、検討されていない方法を研究すべきなのである。

とはいえ、私たちが注意するのは、Cicourel が「伝統的な」社会学に反対しているとするこの要約は、彼の批判のひとつの次元だけを示しているということである。もうひとつの、おそらく相反する次元とは、彼の「伝統的な」方法を、社会生活の日常的で相互行為的な方法とその過程を説明する技術によって、改変し、改善しようと試みたことである。このように、混乱を引き起こすほどに、時折、彼は社会的なプロセスに対する適切な知識さえ与えられれば、私たちは、現在の方法の

欠点を矯正することができる」と議論しているように思われる。また、他のときには、押しつけられた評価のシステムの有用性を、それらが社会的なプロセスの「本質的な」性質を歪めるという理由で否定している。こうした議論においては、慣習的に用いられてきた調査の方法を改善することは、あまり役に立たないとしている。その代わりに、社会学者は、日常生活における分類やカテゴリーはメンバーによって達成されることさえ、明快に理解しなければならず、メンバーの当たり前とされている方法を用いて、社会学者自身もそれらを考案してそれらの意味を理解しなければならないとする。この点で、Cicourel は、エスノメソドロジ的な取組の基本的な観点を明らかに定式化していた。

Cicourel は、彼の後期の本、『The Social Organisation of Juvenile Justice』で、これらの関心事にある種の経験的な表現を与えている。この本は、二つのカリフォルニアの都市で、着想され、確認され、処理されたものとしての、年少者の非行行為に関する研究である。それは、とくに、警察と保護観察の役人が、たぶん公式には「年少者の非行行為」となる人々を扱うというその人たちの日常的な課題の方法を検討している。

Cicourel による、正統派の社会学の方法に対する批判は、社会学的な調査の現象としての「年少者の非行行為」に関する彼の概念と、社会学者たちが伝統的に使ってきた概念とのあいだの違いをめぐって展開される。Cicourel の見解では、年少者の非行行為は、社会学的な現象として、それによってメンバーと確認される方法から分離することはできない。非行行為とは、それが何であれ、どこであれ、メンバーが、ある行為や、ある行為者たちに「非行」という肩書きを負わせるプロセスを通して、メンバーが構成するものである。そ

の結果として、Cicourel の調査は、年少者の非行行為を確認しコントロールするという責務に公式の責任を負い、その日常的な活動に「問題」に対する対処が含まれている人々に焦点を合わせるものとなった。

彼が提唱したことは、非行に関する通常社会学の概念は、それを「社会的な事実」として見るものであり、共通の特徴と、おそらくは共通の「原因」を持つものだということである。

Cicourel にとっては、この見解はメンバーが非行という行為について持っている見解を厳密に反映するものである。すなわち、メンバーも、紋切り型の社会学的な研究者たちも、非行を、確認できる方法で構成される物事というよりも、むしろ客観的な現象であり、社会的な世界の「そこにある」ものとして見なしている。たとえば、年少者の非行行為に関して、「非行年少少女として知られている」年少者たちが、「これまで有罪判決を何とか免れてきた」など「報告されない」行為が存在することは、警察官や、保護観察の役人や、裁判官や、社会学の調査者たちのあいだでは常識による知識である。そのような知識から、メンバーは、非行の有罪判決を受けた率より多い、非行の「実際の発生率」について語ることもできる。これらの種類の考えは、法を執行する役人たちの活動を支持するものである。Cicourel は、詳細な素材によって、非行行為のケースが、警官やその他の人々により、このような種類の考えを出来事に適用することによって構成されていることを示そうと試みた。したがって、非行の社会学的な研究は、法執行のプロセスを研究し（たとえば、公式記録の統計など）、これらを犯罪者たちの特性と比較し、それらの関係性を見出すものである。だが、その人たちがそうするのは、主として、その人たちが、関係者たちと、おおまかに同

じ種類の常識による推論を採用しているからである。この取り組みに対する代替案は、社会学的な研究の中心的なトピックの検討されていないリソースから採用されている常識による知識と方法に立ち返ることである。

表面的には、Cicourelの年少者の非行に関する取り組みは、ラベリング理論家の逸脱に対する一般的な取り組みと類似したものと見えるかもしれない。私たちが第4章で見てきたように、Beckerのような理論家たちは、「逸脱」を他者から何らかの規則に違反したものとして知覚された特定の行為に負わされるラベルだと見なす傾向がある。とはいえ、彼らの分析においては、特定の社会的規則を確認し、それらを社会のさまざまな利害集団に位置づける以上に、さらには踏み込まない傾向がある。Cicourelは、他方では、ラベルと機会の両者が、それぞれお互いに構成要素となっている、実践的な推論や意思決定の方法を記述することに関心を持っている。

1990年版（一部抜粋）

序論

エスノメソドロロジーを、シンボリック相互作用論の後継者であるとする考えは、興味をそそるものである。エスノメソドロロジーが、少数者の役割、そして、主流の社会学に支配的な、理論的で方法論的な傾向に対して、注意深く批判的な意見を述べるといふ、一度はシンボリック相互作用論によって占められていた役割を相続した。この限りにおいて、この見解には、何がしかの真実が含まれている。また、取り組み方にも、いくつかの表面的な類似点がある。ただし、現象や発見の観点というより、むしろ「調査の態度」と呼ばれるレベルにおいて、それが当てはまる。シンボリック相互作用論の継承者としてのエスノメソ

ドロロジーという概念には、また、いくつかの年代ごとの証がある。エスノメソドロロジーが、公然と認知された取り組みとして存在するようになったのは、1967年のHarold Garfinkelによる『エスノメソドロロジーについての諸研究 (Studies in Ethnomethodology)』の出版による。この考え方の革新的な性質と、それを理解するという問題は、ことによると、より小さい規模で、1950年代と1960年代に、シンボリック相互作用論が引き起こしたのとちょうど同じように、1970年代を通して相当な論争の焦点となった。だが、この論点の範囲を越えて、相違は重要なものである。私たちは、これらの相違を、この章の終りでより詳細に考慮することになるだろう。

私たちが注意して心に留めてきたように、シンボリック相互作用論によって発生した論争の主要な結果のひとつは、社会学者たちに、相互作用論の考え方を、彼らの研究に編入し、その方法論を、他の取り組みから引き出された方法と統合する方法を探すようにする動機を与えることであった。その顕著な仮定と、批判的な姿勢にも関わらず、シンボリック相互作用論は、結局は、修正されたうえで、社会学の主流に含めることができるものであるように思われる。エスノメソドロロジーについては、同じことは言えない。論争の熱は、近年には弱まってきている。だがそれは、エスノメソドロロジーが、主流に組み込まれたからではない。それは、社会学のその他の人々とは非常に差異のある、全体として、少数派の追及に留まっている。事実、その現象という概念と、どのように現象を研究するかは、それを、さらに、伝統的な社会学の探究から引き離すように発展させてきた。

エスノメソドロロジーの起源

社会学における顕著な考え方としてのエスノメソドロロジーの定式化は、非常に大部分において、一人の人物、Harold Garfinkel による達成である。その基本的な取り組みを、1950年代と1960年代に書かれた一連の論文において、概説したが、Garfinkel である。これらの考えを学生たちや同僚たちに紹介し、その人たち自身が経験的な研究をすすめるように奨励したのも、Garfinkel である。そして、今日まで、Garfinkel は、エスノメソドロロジーを先導する人物であり続けている。だが、エスノメソドロロジーという考えは、突発的に、彼の頭脳から、生じたわけではない。それらは、二つの主要な影響の組み合わせまで、さかのぼることができる。すなわち、それらは、Talcott Parsons の社会秩序の問題と、Alfred Schütz (1899年-1959年) による現象学的な論文である。

Garfinkel は、1940年代の後半に、ハーバード大学で、Talcott Parsons のもとで学んでいる。当時は、Parsons は、全身全霊、遠大なプロジェクトに従事していた。それが、彼の余生のすべてを占めることになった。第2章で私たちは、Parsons の「秩序問題」という概念と、彼の社会システムとしての社会に関する理論について概説した。私たちが見たように、それは、さらに大きなプロジェクトの一部であり、そこに含まれているものは、「行為の理論」についての社会的な知識の基本的なカテゴリーを再考する試みに他ならない。第2章では、私たちは、この理論が、どのようにして、文化や、性格や社会システムを理解しようとしたのかを見てきた。Parsons の行為の理論の核心にあるのは、「ボランティアズム」という問題である。すなわち、社会的な生活のシステムの性質を、社会的な行為者として、人々

が、彼らが従事する行為のコースを選ぶという事実を認識する観点から説明するということである。この問題に対する鍵は、Parsons の見るところでは、行為者が下す選択の社会的に構造化された諸力を同定することである。これらの社会的に構造化された諸力は、行為そのものに根づかなければならぬ。しかも、どうにかして、それを超越しなければならない。Parsons は、それらに対して、行為の「創発特性」として言及した。これらの創発特性のうちで、最も重要なものは、規範的な価値観に対するコミットメントである。それらは、行為者たちが、いかなる種類の状況で、いかなる行為の選択が適切であるかについて知っている共有されたコミットメントなのである。なぜなら、社会がそれらから作りあげる必要要件に応じるように動機づけるために、行為者たちは、これらのコミットメントを共有しているからである。彼らがそうするのは、根本的に、彼らが、これらの必要要件を、倫理的に正しいものと知覚しているからである。このように、Parsons は、秩序問題に対する「解決」を「規範的な秩序に動機づけされた応諾」を含むものだと思いだめた。

これこそが、Parsons の社会秩序の問題に対する理論的な解決策だったが、Garfinkel にとっては、Parsons の達成は、社会学には、その経験的な知識の基礎として、その根本的な現象である行為の性質に関する、いくつかの矢々の分析が必要であるという Parsons の認識である。Garfinkel の見解では、Parsons の考えの試金石になるべきは、人々が引き起こした種類の知識でなければならない。彼らは、普通の社会生活に対する、どのような記述を可能にしたらだろうか。彼らは、社会学者たちに対して、社会的に組織された現象としての日常的な活動に対して、どのような種類のア

クセスを与えただろうか。

Parsons の理論に対するこれらの疑問を提出するにあたって、Garfinkel は、社会学の基礎についての Alfred Schutz の哲学的な著作の影響を受けていた。Schutz の Parsons との違いとは、それらの根元を、Schutz が社会学的な理解の基礎に対する分析としてとった全面的に異なる取り組み方に持つ。Parsons にとって、根本的な問題は、行為のシステムがどのように構築されているかと、協調性や、安定性や、合理性という属性を持つシステム—言いかえれば、普通であることの属性を持つものとして、どのようにすれば、行為がそれらを示すかを考えられるかということだった。Schutz にとっては、社会学の基礎は、「システム」の観点から理論化された行動のレベルに置かれるべきものではなく、日常生活の行為者たちによって経験されたものとしての行為のレベルに置かれるべきものだった。Schutz の議論するところでは、Parsons の信奉者たちの取り組み方の狙いは、行為者の「主観的な」立場と、社会学者の「客観的な」立場を統合することである。しかも、行為者の主観的な観点を社会学者の客観的な観点に変容することによって、それをした。Parsons は、このように、行為者の実際の理解を分析することを回避した。だが、それは、彼らのあるべき場所を、これらの理解がシステムが維持されるためにとらざるを得ないものの、社会学的に理想化されたセットに置くことによってである。結果として、行為者の実際の理解が位置している日常生活の世界は、社会学的な現象としては「失われる」。

Schutz が最初に、彼の考えを公開したのは、1930 年代の初頭であり、Max Weber の「解釈的な社会学」への批判という観点からである。Schutz は、人間が彼らの社会的な環境を経験す

るのは、社会的に意味あるリアリティとして、そうするのだという Weber の見解に同意していた。私たちは、他の人が何かを言ったり、行ったりするのを聞くとき、私たちは、それらの身振りや言葉の意味を理解する。日常的な社会的な世界は、「解釈的なリアリティ」なのである。Weber は、「行為」を「それをする個人が主観的な意味をそれに与える場合、また与える限りにおいてすべての人間の行為」として定義し、社会的な行為を、「他者の行為を考慮し、それによって、その道筋を志向する」行為として定義した。いかなる研究においても、社会学者は、行為者が、その行為に「付与している」主観的な意味を「理解」しようとしなければならない。もし、その社会学者が、これを正しく、適切にすることができなければ、その研究は誤解に基づくことになる。そうなると、何の科学的な価値もないものとなる。

Schutz が議論したのは、Weber の分析が、意味と行為に関する社会学的な分析が、取り組むべき、問題そのものを前提としていることである。Weber を超えるには、「一步、引いて」、Weber が前提としたことに問題があるとする必要があった。特に、Weber の「主観的な意味」は、ある行為が単一の意味を持ち、この意味は、全面的に、その行為を行う行為者に起因するものと暗に示しているように思われる。Weber の見解では、社会学者は決して、あれこれの行為者の心の中に何があるのかを「本当に知る」ことはできない。そうである以上、彼が意味に与えることができる唯一の記述は、理念化されていたり、誇張されていたりする(理念型)になる。Weber の設定で、もし個々の行為者が、完全に「主観的」だとしたら、社会学者たちは、どのようにして、これらの理解が一緒になって調和して、いくつかの「外部的な」同意の情報源を呼び覚まし、安定して秩序

だった社会生活のパターンを産み出すのに十分なものとなっているのか、説明しなければならない。この思考のラインは、必然的に、Parsonsの秩序の問題の解決へとつながることになる。

Schutzの見解では、Weberは、行為者たちが、彼らの社会的な世界に対して持っている相互主観的な経験を明らかにすることに決定的に失敗している。Schutzが「相互主観的」という言葉によって言いたかったことは、日常的な社会的な世界は、個々の個人自身の意識を通して、経験される。そして、その世界は、「私的な」世界とか、個々の個人にとって、私的なとか、独自のものとして理解されるわけではない。むしろ、社会的な世界は、個人が私的に含まれている共通の共有された世界として経験される。日常生活の共通で「客観的」な性質は、社会的な行為者としての、私たちすべてから、当たり前と見なされている。こういったことである。私たちは、他の人たちが、私たちが何について話すことになるのか知っていることを期待する。また、私たちが見ているものを見ることを期待する。だが、私たちは、自分たちが、少なくともいくつかの点で、私たちに特別なものである共通の世界に含まれている在り方を当たり前のこととみなしてもいる。そういうわけで、Schutzにとっては、「客観的」と「主観的」は、行為者の常識の考え方の次元となっている。Schutzの分析の焦点となるのは、この常識による考え方である。

Schutzの主張では、社会的な世界は、「所与」の世界として経験される。すなわち、それは組織化されており、整然としていて「そこ」にある。すなわち、それは、いかなる個人とも独立して、それ以前に存在している。世界の「所与性」は、個人が「調べる」ことを追求するような仮説ではない。むしろ、それは、疑問視することもできな

い疑いのない「事実」として扱われている。ここで、Schutzは、Edmund Husserlの現象学的な哲学に大きな影響を受けている。とくに、Husserlの日常生活に対する「自然的な態度」の概念に影響を受けている。この用語によって、Husserlは、人々が自分たちの日常生活を、その人たちの経験に費やして過ごしているリアリティに関する仮説に注意を引きつけている。Husserlにとっては、「現象学」とは、人間の経験の性質と基礎を記述しようとする彼の試みとかかわるものである。経験を経験として検討することができるためには、哲学者は、「自然的な態度」を宙づりにし、すなわち、自分自身を、物事のリアルさに関する通常の仮定から切り離して、それによって、「世界を括弧に入れる」。この方法で、Husserlは、現象学者が、意識そのものの特徴について検討することができると提唱した。

Schutzは、Husserlによる究極的な哲学上の狙いを拒絶している。だが、彼は、社会的な経験に関するこれらの考え方の価値を認識していた。日常生活においては、人々は、物事の「リアルさ」を系統的な懐疑の問題として扱わない。また、事実上、扱うこともできない。社会的な世界は、私たちにとっても、他の人たちにとっても、そこに存在する。同時に、この世界は、私たちの特別な経験という観点から、私たちひとりひとりの認識によって構成されなければならない。私たちが認識する手段には、Schutzが「常識による知識」と呼んでいるものが含まれている。この概念は、行為者たちが、彼らの普通の日常的な世界の中で、暮らし、その一部であることによって、得た社会的な世界に関する知識に言及している。行為者の、身のまわりの物事の普通さと理解可能性の認識は、行為者が、この常識による知識を利用することに由来する。このように、常識による知識

によって、私たちは、私たちが経験する物事を、それらが「どのような種類のものか」を理解するためにカテゴリー化したり、名前をつけたりできるようにする。この知識を構成する概念は「類型化」である。すなわち、それらは、対象や、出来事や行為のコレクションのうちで、何が典型的で標準的かについて言及する。社会のメンバーとして、私たちは、日常的な世界を馴染み深く、普通で、ありふれたものと、私たちが見られるようにしてくれる類型化のストックを持っている。これの類型化は、私たちの個人的な発明ではない。それらは、私たちが他の人々と共有している言語の中に具体化されている。言語を通して、類型化のストックは、私たちに受け渡され、私たちは世界の物事に対する計りしれない知識のストックを得る。このストックのわずかな断片だけが、私たち自身の直接の世界の観察に由来している。

私たちの常識による知識に中心的なものは、他の人々を社会的行為者として類型化する。私たちは、他の人々の行為を、まったく日常的にやすやすと認識することができる。それは、彼らがどのようなタイプの行為者であり、どのような種類の動機づけと関心を彼らが持っているのかについて、たとえば、「良い教師」であるとか「怒っている父親」であるとかについて知ることができることによる。自分たちの類型化に基づいて、私たちは、他の人々が特定の方法で、私たちに対して行為するかを仮定し、その人たちに対する私たち自身の行為に対して予測可能な方法で反応することができる。私たちは、「なぜかという動機」(理由)と「何かをするためかという動機」(目的)を、その人たちに帰することができる。このようにして、私たち自身の行為をどのように計画すればいいかを知ることができる。

類型化の存在によって、行為者たちが、その人

の社会的な環境を「共通に知られたもの」と扱う、すなわち、本人にとって、他の人々にとってそうであるのと同じだと扱うことが可能になる。Schutzは「視界の相互性」と彼が名付けたものの重要性を強調している。この概念によって、彼が言わんとしていることは、類型化のストックに基づいて、個人は、社会的な世界における出来事と行為が、彼ら自身に対してと、同じように、他の人々にも理解できるということを想定することができる。さらに、理解の相違は、社会的に組織された相違として扱うことができる。たとえば、私たちは、医師が、私たちよりも医学について、より多くのことを知っていると期待する。日常的な世界が、いくつかの限定された点で他の人々とは違っていることは、私たちにとって、「リアリティの強調点」を弱めるものではない。

Schutzは、さらに進んで、日常生活における「リアリティ」を、夢の「世界」や夢の「世界」などの「他のリアリティ」の知識の構造化と組織化を対照させることによって、「多次元的なリアリティ」という概念を導入している。ここで、とくに適切な関連性を持つのは、彼による日常生活の世界と科学的な理論化の世界の間の比較なのである。

日常的な行為者の共通の考え方は、本質的に、実践的な考え方である。個人の注意の主たる焦点は、その人の当面の状況にある。その人は、実践的な方法でこれらの状況に関与しているすなわち、彼に対して他の人々が行為し、次には、彼が彼らに対して、行為しなければならない。実践的な生活のプロセスで、個人は、日常的な状況に対して「リアルタイム」で起きるものとして対処する。彼がどのようにそうするかは、一部には、彼自身の「当面のプロジェクト」に左右される。彼

の状況が非常に即座の適切に関連するものであることを特徴づけるものは、その状況での彼自身の関心と目的によって決定される。取り掛かることもできる多くのことが無視されることになる。だが、それは、その個人に応答する能力がないためではなく、彼に、「いまここで」そうするための実践的な理由がないからである。ある行為が、たぶん、それが無視できるものとして、どのように見えるかと違ったように理解されるのは、それが、当面の実践的な状況とは適切な関連性を持たないからである。

科学者の考え方は、この意味では、実践的ではない。科学者の理論的な関心は、「いまここで」対処する必要によって決定されるものではない。その代わりに、それらが形成されるのは、彼の「科学的なプロジェクト」によるものであり、それは、一定の形を与えられた知識の追求なのである。このプロジェクトの実現には、日常生活の世界とはまったく場違いな姿勢が採られる。このように、科学者たちは、疑いと懐疑主義の態度で、活動することができ、またしなければならない。もし、彼らが、そのような疑いと懐疑主義を、日常性活に適用しようとすれば、その個人は「気が狂っている」ものとしてレッテルを貼られることであろう。また、科学者は、知識の対象を、疑いのない「リアリティ」ではなく、改訂できる構成概念として扱っている。そういうわけで、Schutzにとっては、科学的な知識と日常的な知識の間の違いは、たんなる正確さや一般化可能性の程度の問題ではない。それは、人がどのように、世界を見て、それを志向するかという質的な違いなのである。この意味では、科学者にとって、日常的な行為者にとっての「世界」は根本的に異なるものである。

Schutz が信じているのは、日常生活と科学的

な理論化のあいだの「リアリティ」の違いは、社会学に対して、特定の問題を引き起こすということである。これらの違いが大部分は無視される自然科学とは異なり、社会学は、「社会学者の世界」を「日常的な世界」に関係づける方法を見つける必要がある。なぜなら、人間の相互行為こそ、研究される主題だからである。Schutz は、かなりの量の思索を、この問題に割いている。彼が提案しているのは、社会学が「第2階の構成概念」を採用しなければならないということであり、その場合には、日常的な行為者は、「第1階の構成概念」で活動する。社会学の概念は、科学的な目的のために産出され、用いられているものである。それらは、人間の行為という現象に言及するものであり、人間の行為は、常識による用語で、すなわち、第1階の構成概念として、すでに意味を持っている。したがって、社会学者は、明らかに、これらの二つのレベルの概念を関連づけなければならない。この方法によってのみ、社会学は、日常的な世界との接触を失わずに、一定の形を与えられた知識の科学的な目標を達成することができる。ことによると、Schutz は、本質的に、実践する社会学者というより、むしろ社会哲学者だった。こうした理由で、どのように「日常生活の社会学」が構築されるべきかに関する詳細については、不明瞭である。そのような社会学を経験的なプログラムとして確立することに着手したのは、Garfinkel である。したがって、この点で、私たちは、Garfinkel による、Parsons の行為の理論に対する研究に立ち返る必要がある。

経験的なプログラムとしてのエスノメソドロジーの確立

Parsons の理論は、単純に、行為者が、社会の規範的な制約を (a) 認識することができる。

(b) それに応じるよう動機づけられている。このように想定することによって、秩序の問題を「解決」した。Parsons の理論では、行為者たちは、共通の理解に基づいて協調的に相互行為を行うことができる。なぜなら、そのような理解は、共有された規範的なコミットメントという形で、それらの状況に「組み込まれている」からである。Garfinkel は、Parsons の理論の、この重要な仮定を留保するという理論的な手段をとった。Garfinkel は、行為者たちは、共有された理解を持たなければならないと仮定しないで、この可能性を問題があるものとして扱おうとした。もし、共有された理解が、行為者の社会的な状況(すなわち、「社会システム」や「共通の文化」など、それが支えられているもの)によって、前もって与えられているのではないとすれば、行為者たちは、どのようにして、社会生活が、秩序だって、合理的で、予測可能であるなどという認識を維持できるであろうか。Parsons の学派の見解では、ひとたび、共有された理解という仮定が取り除かれたなら、行為者は、混沌とした意味のない世界、または、事実上、同じものになる可能性があるもの、独自で独我論的な世界をさまようことになる。この仮説を取り除くことは、Parsons の理論の準拠枠全体の外側を動くことを意味した。だが、他方で、それを示唆する分析的な狙いを保持することが、すなわち、社会秩序の基礎の探求なのである。

社会秩序の「現場でのローカルな産出」

もし、行為者による彼らの状況に対する理解が「外側から」、共通の文化によっては保証されないとすれば、それらは、どのように記述されるべきだろうか。Schutz にしたがって、Garfinkel は、それらを内側から構築されるものとして考えると

いう革新的な手段を採った。これは、たんに、行為者たちが、これらの出来事が持っているリアルで、客観的な性質に対して、注意して見ている出来事や行為の意味に対する「主観的な」理解を形成することを意味するだけではない。むしろ、それが意味していることは、社会秩序を構成する特徴であり、アイデンティティーであり、行為が持っている分かりやすさと秩序性である。それは、活動そのものの産出であり、「ただこの」方法で、「ただこれらの」参与者たちによって行われたのである。言い換えれば、Garfinkel は、社会秩序を、「参与者たちによって産出される」ものだと考える。どのようなものであれ、活動や場の表示の認識できる特徴は「現場でローカルに」産み出されたものと見るべきである。すなわち、行為が、その活動に従事した人々によって行われた方法で、それを通して産み出されたものなのである。それが、まず、「この」活動や場として、認識可能であることが、現場でのローカルな産出なのである。

社会秩序の「現場でのローカルな産出」というこの考えは、エスノメソドロロジーにとって、まさに鍵となる考え方である。その含みを理解することは容易なことではなく、エスノメソドロロジーに対する多くの誤解は、それを Garfinkel が意図していなかった方法で受けとることから生じている。最も重要なこととして、それは、個人が、社会的な状況で「何であれ、したいことを自由にすること」を意味しているわけではない。人々が、どの程度、特定の状況において、「策略を用いる余地がある」かは、それらに対する彼らの責任と義務、そして他者が含まれていることや、その他の多くのありうる特徴に左右される。これらの特徴は、社会的な行為の場として、状況の社会的リアリティを作りあげている。それは、個人が行為

するこの実践的なリアリティの背景をなすものである。Garfinkleは、このリアリティを否定してはいない。もし、彼がそれを否定したなら、エスノメソドロジーは、ほとんど、社会学的な取り組みと見なすことはできなかったことであろう。エスノメソドロジーと他の社会学の考え方の違いは、社会生活のリアリティをどのように考えるかということである。

Garfinkelが提唱したことは、社会生活のリアリティは、メンバーの理解に存し、それだけに存するということである。言い換えれば、彼が一社会学的な目的のために一仮定したことは、それが、状況のいくつかの特徴を、「定着された」とか、「必要とされている」とか、「普通」、「固有」、「典型的」あるいは、何であれ、特徴に、「客観的な」性格を与えているものだという事である。これらの特徴に基づいて、行為することにおいて、個人は、社会的な行為、彼らの状況に適合する行為として、彼らの行為を産み出す。

社会秩序の現場でのローカルな産出から、さらに二つの考え方が当然の結果として生じる。一つ目は「社会的な場を実践的に達成されたものとして扱うこと」であり、二つ目は、「メンバーを、実践的な調査者として扱うこと」である。これらの推奨は、場と、それらを構成する行為が、それらの産出の道筋の中で、何とかやりくりされ、組織されていく方法に注意を引くものである。Garfinkelにとっては、社会的な場は、「外側のそこ」にあるものではない。いかなる所与の瞬間にも、メンバーの行為から独立したものではない。むしろ、それらは、場のメンバーや、出来事が絶えず、従事している相互行為上の「つとめ」の進行中の達成として見られるべきものである。Garfinkelは、相互行為的な行為を「つとめ」と考えることによって、場の秩序性を、メンバーの

産出と過程の両方として見なしたのである。彼が、提案したのは、メンバーは、彼らの社会的な世界を達成したり、実現したりしなければならないということである。この達成は「実践的」なものである。この用語によって、彼が強調したのは、メンバーが、無限のさまざまな方法で、彼らの社会的な世界を、制約する世界として、知覚して扱っているという事実である。しばしば、メンバーは、理想的にしたいと願う方法では、行為を行うことができないものと自分たちを見なしている。メンバーは、行為の結果に影響を与える状況に対して、自分たちが、ほとんどコントロールできないものと見なすかもしれない。メンバーは、彼らが、どのように行為すればよいのか、適切に決める十分な知識が欠けていると、信じているかもしれないが、それにも関わらず、状況によって、行為がとられることが必要とされる。メンバーが、ある種の結果を予期していた行為が、結局は、異なるものと判明することを見出すかもしれない。その理由は彼らのコントロールや彼らの予測を超えるものだからである。

Garfinkelにとっては、この問題は、メンバーが、彼らの考え方において「正しい」か「間違っている」かではない。そのようなものではありえないのである。Garfinkelの関心は、メンバーが構築する理解を批判することではなく、それらがどのように構築されるかを調査することである。したがって、疑問は、どのようにメンバーが、どのように、彼らの状況に対する、そのような知覚を達成するかと、どのようにこれらの知覚が、彼らの行動に情報を提供するかということである。メンバーは、どのように、出来事や場に対する認識を「組み立てる」のであろうか。メンバーは、どのように、予期せぬ問題や緊急の困難を「認識する」のであろうか。メンバーは、どのようにし

て、リアルで、適切に関連していて、避けがたい特徴と、適切な関連性を持たず、想像上のものであったり、無視しても安全な特徴のあいだの違いを区別するのであろうか。そして、メンバーは、どのようにして、これらのことを、場の中で、他者と共同して相互行為として行うのだろうか。

Garfinkel が推奨しているのは、エスノメソドロロジーが、そのような特徴をメンバーが知覚したり、認識したりする方法と一致するものとして、社会的な場の特徴として扱うことである。この推奨は、彼の「相互反映性」という概念に表現されている。この考え方は、また、しばしば、誤解を被りやすい、『エスノメソドロロジーの諸研究』の中で、Garfinkel が述べているのは、「説明に必須の相互反映性」である。この表現で、彼が指摘していることは、メンバーが、場や出来事の知覚された特徴として言及する方法であり、それは彼らが記述する場や出来事の一部である。記述は、公平な言語化でもなければ、記述がなされた特定の状況から切り離されるものでもない。むしろ、私たちは、あれこれの方法で、状況の特徴を記述することで、何が起きているのかや、何かが起こったことや、何が起ころうしているかに対して特定の場面を与えている。対処し、記述し、言及し、名前を付けることは、すべて物事や出来事に意味を与える方法なのである。その上、それらは実践的な行為である。つまり、場の中で行われた行為なのである。そのようなものとして、他者によって、お決まりのことで、予測可能なことか、あるいは、問題があり、説明を必要とするものとして、扱われる可能性がある。それは、誰かが、出来事がどのように理解されたのかを表すために与えた記述であるのみならず、その記述が、他者から引き出す反応でもある。

Garfinkel がここで、述べようとしている論点

は、いっぽうの「行為/出来事」、もういっぽうの「行為に関するトーク/出来事」のあいだの一般的な区別を試みることに社会的な価値がないということである。トークをすることは、行為をすることである。メンバーは、起こること「すべて」を記述したり、説明したりする一般的な問題を持ってはいない。メンバーは、典型的に、行為を産み出すわけでもなければ、彼らがしたことを切り離して、独立したものとして、記述したり、説明しようとしているわけでもない。もちろん、ときとして、起きていることが「明確に非常識」なものである場合は、メンバーは、はっきりと、何かを意味する記述や説明の記述を提案しようとする。そこで彼らは、Garfinkel が「定式化」と呼んでいるものを産み出す。とはいえ、たいいていの場合、そのような明白な意味の「訂正」は不必要である。というのも、行為は、それが他者に明らかになるような方法で産出され、活動そのものの道筋で、起きているのである。

遺憾ながら、そのような情勢にも関わらず、Garfinkel は、トークと行為の間に、そのような一般的な区別を想定しているに違いないと、一部の社会学者たちは決めてかかっていた。したがって、彼らは、相互反映性の概念を、「行為者たちによる説明」が、行為の「社会学的な説明」に対して優位を占めなければならないと主張するものとして解釈してきた。行為者が(ときに)説明し、これらの説明が何が起こったのか、なぜそうなるのか理由を与える。だからこそ「説明にある本質的な相互反映性」のおかげで、エスノメソドロジストはメンバーの説明を唯一の有効な種類の説明だとしていると主張される。すなわち、メンバーが言ったことが、「本当に」あることで、メンバーの言う理由が、その人のしたことの「本当の」理由なのである。

Garfinkel の考え方に対する以前の私たちの議論をほんの少し再考してみれば、ここでの誤解を理解するのに十分なはずである。実践的な達成として、メンバーの達成を調査するためには、エスノメソドロジーは、ある行為や出来事が「本当に」どのようなもので「ある」のかについては、いかなる立場もとることを差し控えるのである。その中心的な関心は、そのような事柄をメンバーが、どのようにして決めるかということである。しばしば、もちろん、メンバー自身の間で、何かがどのようなものであるか、どのように、それが説明されるべきかについて、意見が一致しないことがある。さらにしばしば、メンバーが「同じ」ことに対して、異なる定式化をすることがある。だが、これは、単純に、彼らが、それに対して、異なる実践的な関心を持っているからである。エスノメソドロジーにとって、これらのヴァリエーションのどれも、研究のためにさらに多くの現象を提供してくれるという点を除いては重要なことではない。社会学的な調査の一形態としてのエスノメソドロジーは、行為や出来事に対する究極的な決定的な記述を与えることに依存しない、ましてや、挑戦し難い説明を与えることに依存することはない。実際に、少なくとも、これらが社会学において伝統的に理解されているものとしては、「説明」を与えることには、まったく興味がない。

成員性 (membership) と常識による知識の機会に即した性格

これまで、Garfinkel の考え方の概説してきたところで、私たちは何度も「メンバー」という概念に言及してきた。Garfinkel にとっては、この用語は、集合体としての成員性に言及するものであり、それは、世界についての共有された知識のストックの所有を暗に示すものである。そのよう

なものとして、「成員性」という概念は、それが、所与の集団の「誰でも」が、社会的な世界について、知っているべきことを構成している概念や信条の組み合わせに言及する点で、伝統的な社会学における「文化」という概念に似ている。とはいえ、文化の概念が用いられるのは、知識の脱文脈化されたかたまり—その性質において一般的的で、普遍的に適用される、考え方の組み合わせ—に言及するためであり、それは、社会学者たちによって、個人の行為を説明するために、集団としてのメンバーに帰せられるものである。Garfinkel は、どのように人々自身が、社会的に組織されたものとして、自分たちや他者の知識を扱うかを吟味したいと思っている。彼が研究することを追求したのは、どのようにして、彼らが知識を、行為の意味をなすものとして帰するかということである。したがって、「メンバー」に言及することは、人々が自分たち自身と他者を「社会的に組織された世界のメンバー」として、扱う方法に注意を向けることである。

Garfinkel が提唱したことは、いかなる出会いにおいても、人々がお互いをメンバーとして扱い、すなわち、彼らが、成員性を、集団的に自分たちと他者たちに割り当て、知識のいくつかの項目を、彼らが常識的に他者が共有していることを「知っている」ものとして扱うということである。この普遍的な成員性の行為は、客観的で、事実に関するリアリティとして、私たちの世界の経験の中心をなすものである。いかなる出会いについても、私たちには、自分たちと他者を、いくつかの点で「同じ」ものとして扱うことが可能であり、このようにして、社会的な世界を「誰にとっても」、「そこにあるのが見える」ような「リアルな」世界を構成しているのである。

それは、この事実上の「共通に知られており」、

メンバーが「場ちがいな」行為を認識し、処理する世界を背景とするものである。もし、誰かが、この世界を、その人が「見るべき」ように見ていないとしても、これが即座に、私たちが、社会的な世界に対する私たちの認識を疑うことにつながるわけではない。むしろ、私たちは、その人の集団的な成員性に対する私たちの理解を修正しようと追求するかもしれない。私たちは、その人の「奇妙な」行為を説明するために、私たちのカテゴリーの成員性に関する知識を頼りにして、なぜ、その人には「誰にとっても」「明白にそこにある」ものと見えるはずのものを見ることができないのか理由を見つけ出そうとするかもしれない。例えば、その人は、「よそ者」であるか、「外国人」であるか、「うわの空でいる人」なのかもしれない。そのような、意味の理解は、その場で、特定の機会の必要性を満たすために、即興的に構成されるものである。

このように常識による知識が、メンバーの実践的な推論の道筋で、そのときどきの方法で使われる。メンバーとして、私たちは社会的な世界が秩序性をもつものであることを見出す。それは、私たちが、あらゆる機会—または、あらゆる人物—を同じものとして扱うからではなく、私たちが、機会の特別性と偶発性を、知ることができ、説明可能なものと理解するからである。

メンバーの方法

Garfinkel が、提唱していることは、行為の自己産出と自己組織化がメンバーの側の方法的な達成だということである。言い換えれば、メンバーが、あれこれの機会の特別性を認識し、説明する観点から、実践的な推論の結果が異なる可能性がある一方で、そのような理解が構築される方法は、一般的な性質を持っている可能性がある。

Garfinkel がここで提唱しているのは、研究のプログラムとしてのエスノメソドロジーに対して中心的なことである。それは、現にそうであるように重要なことであり、その区別を理解することは容易ではない。Garfinkel が論じていることは、私たちは、現場でのローカルな詳細において、機会に対処しなければならず、どのようなことであれ、その詳細に私たちが見出す秩序と意味を見出さなければならないということである。だが、これは、私たちが、この「意味をとる作業」をする方式が、毎回のように、完全に異なることを意味するわけではない。実際に、このようなことがどのように現状でありうるかを想像することは困難である。エスノメソドロジーの課題は、これらのメンバーの方法がどのように見えるかを記述することである。『Studies in Ethnomethodology』で、Garfinkel は、それらの数多くの特徴を提示しており、それには、「ドキュメントを証拠として全体を説明する方法」や、「エトセトラ」の実践や、「出来事に対する遡及的—予期的な認識」などが含まれる。私たちは、メンバーによる方法と概念を、ドキュメントを証拠として全体を説明する方法について吟味することによって、例証することができる。

調査の事実を記録する方法によって、メンバーが、特定のことに関する「文脈依存性」に直面して、行為に関するいくつかの一定の認識をすることが可能になる。この文脈依存性という概念によって、Garfinkel は、日常的な社会的状況のその場に即した性質に注意を引いている。発話や行為のあれこれの項目—それは、分離した状態では多数の可能な方法で理解されることができるとして、見られるが—に直面して、私たちは、ある項目に対して、それを適切に関連した状況との関係から見ることによって、一定の認識を、その

項目に課する。このように、メンバーは、トークや行為の文脈依存性を「修復」しなければならない。何が行われたのかを理解するために、私たちは、「注釈」あるいは、「ミーティング」とか、「家族の口論」とか、「逮捕」などといった、機会の一般的な記述を産出しなければならない。この方法で、私たちは、いかなる社会的な出会いに関する多くの状況と詳細を「何が起きているのか」に対して、一定の認識を提供する記述にするすべての可能な方法を要約するのである。ドキュメントを証拠として全体を説明する方法とは、Garfinkelが、ある状況の特別なものを、それに対する一定の認識を供給するために選択したり、要約したりするプロセスに与えた名称である。メンバーは、何が重要なことなのかを「記録する」ために、いくつかの項目を選び、彼らがそれを理解したものとして、この「速記」の方法で、何が起きているのかを記述するのである。二つの簡潔な事例が、ドキュメントを証拠として全体を説明する方法という概念を例証する役に立つかもしれない。

まず第一に、Garfinkelは、自殺防止センターで働いている自殺の調査者の仕事に関する観察を行った。これらの役人の仕事の一部は、検死官のオフィスに代わって、突然死の法的なカテゴリー化を手助けするために突然死のケースを調査することであった。彼らの調査の結論として、「心理学的な検屍」と呼ばれるものを、彼らは、その死の法的な位置付けに関する推奨として、産み出すことが要求された。調査者たちの中心的な問題は、Garfinkelによって、公式化されている。すなわち、死亡者の遺体を提供され、遺体の物理的な場所や、遺体の周辺に見つかった物体や、死亡者に関する情報が、親戚や、友人や知り合いや、近所の人々や、ときには、知らない人ま

でから収集され—言い換えれば、「証拠」となりうるあらゆるものを提示され—調査者は、死亡者の遺体のその最後の結果として、認識可能な合理的な説明を構築しようとしなければならない。

そのような説明を産み出すには、選択と解釈のプロセスによって行うしかない。調査者は、あるいは「証拠」として取り扱われうるすべての項目を含めて、すべての可能性を包含する説明を構築することはできない。調査者は、彼の説明を組み立てる際に、「疑わしい」ことや、「過去の経験から」知っていることなどに対置するものとして、「誰でも理解できること」に言及する。もちろん、いかなる説明も、異なる光明のもとに、物事を置く可能性がある、その他の材料を明らかにする可能性がある、さらなる調査を主張することによって、異議を唱えられる可能性はある。「さらに多くのこと」が発見される可能性があり、異なる判断が発生する可能性があるという主張に対して、調査者が与えうる唯一の回答は、いかなる量の調査を費やしても、依然として「さらに」という問題は残ると言うだけである。調査者にできることは、せいぜい、課題の実践的な状況に訴えることだけである。どこかの時点で、調査者は中止して、推奨が行われる。この時点で、どのようなものであれ、証拠として取り扱われてきたものが、それに基づいて、判断を下すことができ、判断が下された根拠となるのである。

二つ目の事例は、Garfinkelの同僚のD. Lawrence Wiederの研究から採られている。彼の『Language and Social Reality』（Wieder 1974）は、執行猶予の被告人のための中間施設での「受刑者コード」の働きについて記述している。そのコードは、適切な行為のための不文律であり、非公式なルールのセットであり、公式な制度とは分離して、収容者たち相互と、職員たちとの関

係を律するものである。Wieder は、刑事上の施設のそのようなコードの存在を報告した最初の社会学者というわけではない。囚人の生活に関する文献の多くが、「非公式の」囚人コードが、収容者たちの生活に影響する方法に、焦点を合わせている。このように、そのコードの「リアリティ」は、収容者たち自身と同じくらい、社会学者によっても認識されているのである。

エスノメソドロジストとして、Wieder が提出している疑問とは、相互行為的な達成としての、このリアリティの性質は、どのようなものであるか、というものである。Wieder は、理想化され、脱文脈化された方法で、コードを「構成」しているルールを記述することでは満足していない。これらのルールがどのようなことを意味するのか、記述には、それらが、その中間施設における日常生活を構成する進行中の事実として扱われる方法を示すことも含まれている。Wieder は、そのコードが、中間施設における社会生活に無数の形で入り込んでいることを見出したのである。それは、そのときどきの方法で、一すなわち、あれこれの機会の特定の状況(偶発事)に応じて、言及され、ヒントを与え、それについて不満が漏らされ、公式化され、ジョークの対象とされるものである。ある特定のルールに言及する意味は、その言及がなされた特定の状況に従って、さまざまに異なるものである。たとえば、収容者があるルールを発動するかもしれないし、実践的な観点から、職員のメンバーによって、彼に要求されたある行為が、なぜ不可能であるのかを説明するために、ただ一般化された「そのコード」に言及するだけかもしれない。だが、これは、毎回、何らかのそのような要求がなされたとき、それが同じ方法で応答されることを意味するわけではない。中間施設の人たち、すなわち、収容者と職員は、

そのコードが日常的に使われて、行為のパターン化された整然とした性質を解釈するのに使われるという考え方を使い、そうすることによって、これらの行為が、パターン化され、秩序性をもつものになる一助としている。すべての適格な能力をもつ参加者たちは、出来事がパターン化され、秩序性をもつものとなっているという仮定を当たり前のこととして、共有しており、そして、このパターンと秩序は、そのコードの利用を通じて見ることができる。このように、そのコードが中間施設での社会生活を規制していることは、参加者たちの側では、発見ではないのである。むしろ、この仮定は、解釈的なリソースとして役立ち、それによって、出来事や行為に一定の意味が割り当てられ、それらが「実際には」どのようなものとして見られるかという手段となっている。

1998年版(一部抜粋)

序論：エスノメソドロジー・相対主義者の、主観主義者の社会学

シンボリック相互作用論をめぐる議論における、最近の変化は、いかなるものであれ、社会生活に対する客観的なリアリティを否定する相対主義の姿勢を是認するものである。それを、まるごと、個人の知覚と定義に整理し編集することによるものである。状況の定義という観念が真剣に、その限界まで受け止められている限りにおいて、それは、たとえば、Winchのような社会学的な思考に対する相対主義の風潮も含めて、他の議論を結びつけるものと見られている。最も著しい非難がなされたのは、ラベリングの概念に関してなのである。それは、私たちが第6章で示してきたように、社会的なリアリティに対して、たとえば、逸脱は、それを見る人の目にしか存在しない、というような奇妙な態度をとるものとして見

ることができる。もしシンボリック相互作用論が、そのような発展を助長するものに思われたとしたら、そのとき、エスノメソドロジーは、それをさらに先の極限まで推し進めるものと見なされてきた。

[シンボリック相互作用論を扱った]前章で、私たちが特筆したように、いくつかの点で、エスノメソドロジーは、シンボリック相互作用論に近い、とはいえ、他の一般的により重要な点で、それは、非常に程遠い。それは、確かに、異なる源から由来する。たとえば、直接には、ヨーロッパの哲学や、最も特別に、社会科学の問題に対する Edmund Husserl を祖とする現象学の Alfred Schutz による応用に由来している。Schutz にとっては、これらの問題に関する古典の名句は、Weber の方法論的な著作である。したがって、彼が始めたのは、社会行為に関する Weber の最も基本的な前提を批判的に調査することであった。Weber は、行為者の視点、たとえば、主観的な視点を、そのプロジェクトの中心に置いた。だが、彼は、その視点が構成されるに違いない方法を熟考するための持続的な努力をしておらず、社会が、その中の状況にいる人間に、どのように見えるかについて、いかなる系統的な説明もしようとしなかった。彼は、行為者の視点という前提の含みを、社会学の、その主題となる事柄への姿勢として適切に解決することもしなかった。Schutz は、このギャップを埋めようと計画した。彼は、1920年代に Weber を批判することを始めて、それをアメリカに亡命する前の、1930年代の初期に出版している。

エスノメソドロジーの基礎

エスノメソドロジーの研究の出発点は、Schutz の著作にある。それというのも、主要な

点において、エスノメソドロジーは、社会学的な知識の性質と基礎に関する Schutz の議論の含みから発展した研究に他ならないからである。エスノメソドロジーは、とくに、私たちが世界をどのように研究するかに焦点を当てる。すなわち、方法の問題が、最も良く、その考えを精緻に作り上げる。エスノメソドロジーにとっては、方法という概念は、伝統的に着想されてきた社会学的な方法、フィールドワークやサーベイ調査をはるかに超えるものである。エスノメソドロジーを適切に理解する鍵は、ただ、なぜそれが、現にそのようにあるものとして、呼ばれているかということにある。とくに、そのタイトルにおける「メソドロジー」の重要性にある。

Schutz と現象学

Husserl の現象学に対して、Schutz は、素晴らしい思い付きを持っていた。それは、その方法において、西欧思想、とくに科学と哲学における「実証主義」の精神に対して批判的なものであった。私たちが、第3章で見てきたように、この実証主義という伝統の核心は、新しい、非常に成功した自然科学こそ、リアリティの最も信頼のおける概念の源であり、科学的な方法によって保証されるものだという見解にある。これらの方法の典型的な例は、物理学、すなわち、最も成功した自然科学に見ることができる。この見解は、もし私たちがリアリティとは、どのようなものであるか知りたければ、私たちは物理学の本を参照するのが最善であると考えたものである。だが、私たちは、そこに自分たちが普通に知っている世界とは、非常に異なる世界を見出すことになる。私たちの日常生活で、馴染み深い自然な世界は、物理学の本には、出てこない。すなわち、実証主義の信念を持った多くの思想家たちは、物理学の本

を、私たちに、この日常生活の世界は本当に存在するものではなく幻想の一形態なのだと教えるものとして読むのである。

社会学における支配的な姿勢は、その歴史の大半を通して、実証主義的な仮定を共有している。それは、たとえば、社会学は自然科学の道にしたがっているので、社会学もまた、リアリティを科学的な方法という観点から定義するようになるとする仮定である。純正な社会学的なリアリティは、これらの方法を通して定義される。その結果として、私たちは、社会学的な研究を終わらせた場合にはじめて、社会的なリアリティとはどのようなものであるかを知ることになる。そのような仮定に基づいて、私たちは、それが、私たちがいま、それがあべきだと思っている姿とは似ても似つかないものとなることを予期することができる。私たちの現在の社会的なリアリティに対する知覚は、誤った信じ込みの結果として見られることになる。

この対照は、Husserl によって強硬な反対を受けた。彼は、かたや科学から見た世界と、かたや生活世界 (Lebenswelt) のあいだの関係のこのようなイメージを受け入れなかった。Husserl は、もちろん、科学としての自然科学の達成を拒否したり (あるいは、疑問視したりさえ) したわけではない。それは、彼の疑いが、その発見が構成される方法に関するものだからである。とくに彼が主張したのは、科学が、私たちの科学以前の理解に関係する方法に対する深刻な誤解が、その二つが対立するという誤ったイメージに絡みついていて、それを生み出しているということである。大雑把に言えば、科学は、私たちが経験するものとしての生活世界にとってかわるイメージを提供するわけではない。科学にそれができないのは、科学的なイメージは、二つの点で、生活世界

そのものに由来し、それに依存するからである。X 線による写真は、私たちのパスポートの写真と競合するものではないし、とってかわるものではない。

X 線をスナップショットと比べることから始めて、どちらがその人物についての正しい写真なのかと尋ねる。そうしたやり方は、物事に取り掛かる誤った方法である。すでに適所にある科学的な (と想定される) 写真で始めて、それが、私たちの生活世界と、どのように対応関係にあるのかや、どのように両者が共存する余地があるかを質問するべきではない。Husserl は、むしろ、私たちは科学的なイメージの存在を当たり前と見なすべきではないと考えた。その代わりとして、私たちは、科学の起源、たとえば、どのようにして、世界を科学的な方法で見る可能性が、常識による方法と対置するものとして発展したかを尋ねるべきだとしたのである。

Husserl は、科学の源流を、考え方として、ガリレオに関係づけている。ガリレオこそが、最も影響を及ぼして、物事の性質に対する研究が、私たちが常識的に受け入れている事柄とは、まったく異なる前提から始められるという考えを促進した。さらに、ガリレオが主張したことは、科学的な理解の発展には、私たちの肉眼による感覚で供給される知覚に依存することを疑問視したり、もし必要とあれば、捨てたりすることも含まれるということである。ここに、科学を、世界を知る日常的な方法から切り離す起源がある。すなわち、それらは、自然科学と、出発点から、事実上、どのようなことが成功するために必要とされるかという考え方に組み込まれた。Husserl の研究は、知ることの方法としての科学と常識の関係に関する Schutz の思想の背景を構成した。とはいえ、Schutz は、かたや科学が描き出す世界と、かた

や常識で見る世界を、完全に対照させることから、その焦点をシフトしている。

自然的な態度

その代わりとして、Schutzは、たとえば、外部的な世界の存在を当たり前と見なす自然的な態度にある差異を強調している。それには、二つの形態があり、常識による態度と、理論的(もしくは科学的な)態度である。それらは、非常に異なるものであり、重要な点において矛盾する。だが、そうであったとしても、それらは、まったく別個なものとは、ほど遠い。

その理由とは—そして、Schutzの主張の深い含みとして—私たちは、理論的(または科学的な)態度をとるほうを選んで常識を捨てることはできない。結果として、私たちは、常識を科学的なもの置き換えることはできない。ここで、彼は、デカルトの取り組みに関係づける(第6章を参照)。

デカルトは、彼が哲学が探求すべきだと考えた究極の疑問の余地のない確実性に至る手段として懐疑という手段を推奨している。この方法には、疑うことができるものはすべて疑うことが含まれている。それは、何かしら疑うことができないものが残るかどうかを決定し、たとえば、私たちが特定の知識を得る状態になるためである。デカルトが考えたのは、人は、ほとんどすべてを疑うことができ、外部的な世界の存在さえ疑うことができるということである。ひとつの例外は—この種の抵抗に耐えることができるように思われる唯一のもの—は、自分自身という知性の存在である。疑っているとき、人は考えており、自分自身の存在を前提条件として考えることができ、より厳密に言えば、それは、自分の知性を前提としている。

とはいえ、デカルト主義の懐疑の方法は、その機能を純粹に哲学的な探求の領域に厳密に規定された領域内に限るものである。純粹な理性の運用を通して、特定の知識の根拠を確立させるためのものなのである。ただ考える以外のことをしたい人、何かをしたい人は、デカルトの懐疑の方法では行動することができない—それは、デカルト自身が認識している論点であり、それというもの、彼が関心を持っていたのは、特定の知識をどのように確立するかに関する純粹に哲学的な疑問だからである。行為することは、自分の体と、外部の世界に依存することを必要とする。懐疑という方法は、外部の世界において体を使うことや、その動きを抜きにした、完全に知性だけのものとして通用できるものである。それゆえ、社会における実際の生活は、何かしら別の基礎によって行われなければならない。

自然的な態度

自然的な態度とは、懐疑という方法とは対置される態度である。人々は、その人たちの生活を送るに当たって、疑問にすることもできるはずのあらゆることのリアリティを疑ったりしない。その人たちは、ほとんどのことを当たり前と見なしている。とはいえ、この態度に気づくことは、人々がその人たちの日常生活を送る側での失敗を指摘するわけではない。もちろん、自然的な態度をとっている人々も実際に疑うことはある。だが、実際の事柄に対しては疑わないし、その人たちの第一の優先事項として疑うことができるわけでもない。その人たちは、ただ、疑う必要がある場合、その人たちの実際的な物事で何かがあまくいっていない場合だけ疑うのである。私たちが想定できるのは、人々が疑うのは、何かをするとき、今回も、前回と同じように物事が起こるかど

うかということである。たとえば、その人たちが蛇口をひねった時、前は水が出てきたが、今回も水がでるだろうか、あるいは何も出ないだろうか、あるいは毒性のガスが出るだろうか、といったことである。もし、私たちがそれについて深刻な疑問を抱くとすれば、本当に、致命的なガスが水と同じように出てくる可能性があると考えれば、私たちは、最初に、水が出てくることを確実に確認しようとせずには蛇口をひねることはないだろう。何はともあれ、そんなことになれば、普通の決まりきった行為が深い問題をはらみ、とてつもない時間を喰うことになる。だが、私たちが、とくに、特別な行為についてだけでなく、一般的なことに、そのような懐疑主義をとったら、どのようなことが起こるかを、特筆しておくことにしよう。もし、私たちが、私たちが使う可能性がある、あらゆる他の事柄に対して、同等に懐疑主義的な見解を採るとすれば、それは、たんに問題が限りなく起こるだけではない。それ以上に、問題がどこにでもあり、どのように課題をはじめるといふか、どのように問題を解決するかにさへ問題があるということになってしまうだろう。どのようにすれば、私たちは、その蛇口が実際にはどのようなものなのか確信を持つことができるだろうか。だが、私たちがそれを蛇口であると想定しないとすれば、私たちがそこから何が出てくるか信頼できないという考えに対して、どのような可能な認識が与えられるだろうか。

もちろん、重要な論点は、私たちが、良きデカルト主義者のようには、物事を進めないということである。なぜなら、私たちの普通の生活では、私たちは、今回も前回と同様に、蛇口が、私たちが飲んだり、洗ったりするための水を出してくれることを、ただ当たり前のことと見なすからである。もし、私たちが蛇口をひねっても、何も出てこなかったり、汚れた沈殿物がしたたれば、疑い

が起こる。そのとき、私たちは疑いを持ち、物事を調べ始める。だが、たとえそうでも、私たちは、あらゆるものを疑い始めはしない。私たちが疑うのは、蛇口の働きの属性に適切に関連することだけである。たとえば、私たちは、窓の外を見て、給水の修理工が道路を掘っていないか確認することだろう。自然的な態度における疑いは、場合によって、刺激によって起こることであり、私たちの生活の一般的な条件ではない。社会学に対する密接な関係は、もちろん、もし私たちがどのようにその人たちの社会生活が組織されているかを理解したければ、人々が自然的な態度のもとでは、どのように振る舞うかを理解することである。Schutzの生涯は、まるごと、この企てに捧げられている。

重要なことには、Schutzは、たとえば、その人たちの物事に対する取り組みといった態度を分析している。その取り組みは、社会のメンバーが、圧倒的に示すだけでなく、示すことを必要とされるものである。私たちが「常識」に言及するとき、私たちは、特定の行為や信じ込みを推奨しているのでも支持しているのでもない。その他の点では、私たちには、常識がローカル化された事柄であり、ある場所で、ある時に、常識として考慮されることは、他の背景や、時代には、そのように考慮されないという（しばしば、この議論の筋道の基本的な特徴さえ、誤解している人々によってなされる）反対に対しても、受け入れる用意がある。とはいえ、この推定上の反対には、どのように行動が組織されるのかを理解することに關する論点が、確認される以上のものがある。

常識による態度

主張されているのは以下のようなことである。

- ・人々の行動の成り行きが、人々が当たり前だと見なしていることに依存するのは、行動の組織化の免れがたい特徴である。
- ・いかなる所与の人々の組み合わせのあいだでも、その人たちが当たり前と見なすことには、膨大な数の物事が存在し、その人たち自身のあいだで、その人たちが疑う余地がなく明白なこととして扱う。コメントや説明の必要がなく、進行することとして扱う。透明で、一目瞭然に疑問の余地なく事実であると扱う。いかなる人にも、誰にでも容易に知られていることが、たとえば、常識なのである。

これらの主張のいずれも、いかなる所与のケースでも、どのようなことが常識として扱われるかについては何も言っていない。人々は、21世紀にはどのようなことが常識かという考えについても、完全に安楽でいられる。アメリカは、同じままではないだろう—もちろん、まるで同じではないだろう—が、それは14世紀の中国でも同様に常識だったのである。「いかなる人にも、誰にでも」という言い方は、それ自体の現場でローカル化された適応可能性を持っている。たとえば、21世紀初頭のカリフォルニアのティーンエージャーが「いかなる人も、誰でも」知っていることとして扱う事柄は、そういった人々には当てはまるが、その「誰でも」からは、しばしば、両親や教師、他の大人たちが除外されている。

自然的な態度に支配的な要素とは、物事を成し遂げるといふことに対する関心であり、その実践的な性格である。社会の人々は、物事そのもののために、物事がどのように働くかに関する、可能な最も組織化された包括的な知識のストックのために、発見に関心を持つことはない。著しいのは、その人たちが、特定の種類の物事が首尾よく

その人たちの行為によって完結されたこと、昼食を作ることや、仕事に出かけることや、新しいコートを買うことや、書類を書き込むことや、ストックを調べることや、庭の植物を霜から保護することなどに関心を持つということである。疑いの機会が発生するのは、そのような実践的な企ての文脈の中である。私たちは、一日中、私たちが、ついには、蛇口をひねったときに、蛇口から水が出てくるかどうか思案しながら居間で過ごすわけではない。問題が起きるのは、私たちが水を欲しがる時であり、しかも、もし、いつもの期待される供給が目に見える形をとらなかった場合である。人々が知っていることや、当たり前と見なしていることは、その人たちのために、その人たちが実際にしていることのまわりで組織化される。その人たちが、その条件に対して抱く疑問とは、それらは十分で、すべての実践的な目的のために、当てにできるものか、というものである。その人たちが疑う度合いと、その人たちが疑いを解決するために手段をとる度合いとは、どちらも、実際的な限界の範囲に、特徴的に設定される。もし、水が蛇口から出てこなかったら、そのとき、どのような種類の原因が水の供給を中断させているのかに関する疑問が発生して、このような事柄に対する何らかの調査は、水の供給が再開された途端に、特徴的に終わってしまうのである。

これらの側面は、科学的、もしくは理論的な態度と共有されるものではないが、上記で注意したように、私たちは、科学的な態度と自然的な態度（もしくは常識）的な態度を、まったく別個のものと考えべきではない。科学的な態度は、ある程度、哲学的な懐疑と、常識的による自然的な態度のあいだに位置するものなのである。

科学的な態度

過度に単純化して言うと、科学的な態度とは、実践性よりもむしろ知識そのもの、なされることの対として発見すること、そして、いまここで、実践的な課題の遂行を可能にしてくれる知識よりも知識そのものための知識、それらに関心がある態度である。

さらに、科学的な態度は、常識による態度よりも、疑いの可能性によって動機づけられている。系統的な疑いの哲学的な姿勢により近いものとみることができる。常識による態度とは異なり、科学は、ただ疑うことが、どのようなことを明らかにするのかを見届けるために物事を疑う傾向がある。とはいえ、科学の態度は、世界的な規模のデカルトの「懐疑の方法」を疑うことはできない。それというのも、科学の目的は「外側のそこにある世界」に対する探究であり、それは、もちろん、哲学的な考察で疑うことができる外側のそこにある世界の存在を疑うことはできないからである。この理由によって、科学は自然的な態度に含まれる。

さらに、現役の科学者の疑いは、哲学者の疑いよりもはるかにずっと特定の焦点を合わせるものである。というのも、現役の科学者が疑うことは、この特別な疑いを調査し、解決するために、何かしら特別な事柄が、それが見える通りのものか、受け取られてきたとおりのものかということだからである。それをするには、科学的な調査は、多くのことを、(当面の)疑いの可能性から除外しなければならない。非常に多くの事柄を、社会の普通のメンバーとちょうど同じように、まったく常識による事柄として当たり前と見なさなければならないのである。同様に、哲学者たちは、言葉が意味を持ちうるかどうかを疑うことができる。ある人が何かを言ったとしたら、他の人

がそれを理解することが可能かどうかを疑うことができる(実際に疑う)。だが、科学者たちが研究をしている意図は、同僚のプロフェッショナルに、それを報告することである。したがって、そのような疑いを楽しんでいる余地はない。

したがって、科学者の実像を、常識による理解に対して、徹底した包括的な懐疑を抱くものとして描くのは、不当に、科学が哲学的な懐疑主義であると印象付けることである。実際の科学が、どのように選択的なものであり、常識を疑うことにも選択的でなければならぬことに注意していないことになる。科学が常識を疑うことと、それに依存していることの程度の両方(しかも、同時に)の点は、とりわけ、社会学にも、必然のことなのである。実際の科学的な研究者の態度は、もちろん、世界に対する常識による理解の特定の受け入れられた特徴を実際に疑うことを許容するものである。その世界とは、科学的な研究者が住んでいる世界であり、たとえば、コペルニクスの時代には、地球が宇宙の中心であるという観念が抱かれていた。それにもかかわらず、科学的な検討そのものは、多くの点で、自然的な態度に従属している。事実、科学的な態度は、多くのことを、当たり前と認めなければならない、科学的な研究をするための、条件として、それらを当てにしなければならない。それは、物事を、非常に多くの常識が科学の世界にいる人々に対して持つのと同じように、物事を取り扱わなければならない、多くの点で、科学的なコミュニティ以外の人々に対しても同様なのである。

相互主観性

しばしば、Schutz が、社会的な世界をもっぱら社会のメンバーの頭の中にだけ存在するものにしていくという批判がある。この批判は、しばし

ば、主観主義の究極的な形態として、エスノメソドロジーそのものに対する批判にもつながってきた。この場合もやはり、Schutz についてのこのような読み方は、正確というには程遠い。というのも、彼が主張したのは、社会的なリアリティは、相互主観的なものであり、たとえば、社会を構成する個人は、それぞれの個人的な差異的な知的な世界を持っているわけではなく、それどころか、その人たちは全員(態度の調節を許容しながらも)ひとつの同じリアリティに住んでいるということだからである。簡潔に言えば、社会的な世界とは、その住人に共通なものとして知られている世界である。

その上で、Schutz は、以下の点を強調している。

・それぞれの個人が世界を理解している度合いは、知識についての社会的分業に依存している。すなわち、個人がその人たちを取り巻く世界を理解するのは、その人たちが知っていることの観点からである。もちろん、人々が知っていることの大部分は、自分自身の経験から得られたものではない。これもまた、自分自身の経験などから大部分のことを知ったわけではない他者から学んだことなのである。たとえば、私たちは、世界が丸いことを当たり前と見なしている。だが、私たちはそれを学校で理解したのであり、世界中をトレッキングすることによって得たわけでない。

・個人は、手持ちの経験知のストックに基づいて行為している。だが、それは、(1) 社会の他のメンバーから、伝えられることによって築かれたものである。(2) 社会的な知識のストックに由来するものである。そして、(3) 家族が子供を養育したり、学校で教育したり、研修や、同輩との会話などの社会的なお膳立てを介して、個人に伝達されてきたものである。

・根源的な岩盤となる想定は、他者が知覚するのとは、まるで違ったものとして知覚される、独自の私的な世界に住んでいるわけではないということである。対照的に、世界は、他者によっても、他者に対しても知られているものである。他の物事と同様に一同じように、個人にも知られている。もちろん、物事は、すべての観点から、同じものと見えるわけではない。だが、個々の個人の観点に対して根本的なことは、それが、個々の個人の特定の経験に関連する相違を調整するという仮定である。

この3つ目の論点に関して、Schutz は、二つの重要な仮定を同定している。

1 視界の相互性

2 立場の入れ替え可能性

(1) については、人々は単純に、私たちが物事を見る方法が、他の人々によっても適合され、互いにやりとりすることができ、自分たちの空間に占める異なる位置や、行為の筋道における異なる立場を許容するものと想定している。第6章の、私たちがよく知っている事例では、高速で運転している運転手は、この想定に対して自分たちの命を委ねている。すなわち、バックミラーを介して、後方に見ることができるドライバーは、自分たちの前方にいる車を見ており、後方にある車の前方の知覚は、自分たち自身の車の後ろの人々の知覚と調和するはずだと期待し想定している。

仮定(2)の立場の入れ替え可能性が必然的に伴うのは、二人以上の当事者たちが、異なる立場にありながら、物事を異なる見方で見るが適合させることができるということである。しかも極めて重大なことに、もしその人たちの立場が入れ替わったとしたら、その知覚もまた交換するだろうということである。事実上、もし、ドライバー

が、魔法のように一方の車から別の車に交代するとしたら、それまで前方を走っていたドライバーは、厳密に、これまで後方を走っていたドライバーが見ていたものを、今、見ていることになる。その逆も然りである。たとえば、高速で走行しているドライバー「A」が、車線を変更しようと意図して、方向指示器を切り替える。そのとき、「A」には、自分自身では、後方の方向指示器が点滅するのを見ることはできない。だが、それにも関わらず、「A」は、後方にある車のドライバー「B」が、それを見ることができ、ドライバー「A」が、位置を移動してよいかを確認するために、それをしていると見ることができ、それによって、その操作による適切な警告を受け取っているものと想定する。

Schutz にとっては、人々がどのようにして、相互主観的な世界に居住しているその人たちの認識を維持しているのか、どのようにして、それは、あなたにとって、私にとってと同じものであるのか、私たちのあいだにある、さまざまな立場と背景の違いを許容しているのか、ということを理解することが分析的な問題なのである。もちろん、世界を共通に知られたものとして、このような認識を維持することが、ときとして、社会の人々の問題になることはありうる。視界の相互性と立場の入れ替え可能性を自明視し、決まったように、これらの仮定を頼りにすることは、いつも、うまくいくとは限らない。時々、人々は、その人たち自身が、これらの想定に一致する方法で行動しない人々に向かい合うものである。Schutz 自身の事例では、「よそ者」が、そのような期待が失敗しやすいタイプの人物のひとつのタイプなのである。

多元的な現実

Schutz は、社会的な世界における出来事の意味が、日常的に共有され、規則というよりは、むしろ主観的な多様性が例外である度合いを強調している。それは『Collected Papers』(1962)という彼のエッセイのひとつで、彼が正反対の見解を助長している「多元的な現実について (On multiple realities)」というタイトルに現れているように思われる。そのような見解は、人々がリアルなものとして理解する物事が、個々人のあいだで、大きく異なることがありうるし、実際に異なることがあり、それぞれの個人は非常に異なるリアリティに居住していることを強調するものである。だが、それは、またしても、そのエッセイを読む、まったく誤解を生む読み方である。それというのも、Schutz が関心を持っているのは、第一に、それぞれの個人の経験のエピソード風の性質であり、日常的な一日のコースに関する私たちの経験の質が一様ではなく、変わりやすいことや、私たちがまったく異なる状態の組み合わせを通過すること、これらのすべてが、経験されるときにはリアルに経験されることである。たとえば、目覚めているときと眠って夢を見ているときの対照である。私たちが目覚めているときは、私たちの生活のまわりの毎日の出来事がリアルなものとして理解されるが、私たちが眠っていて、夢を見ているときは、私たちの夢の中の出来事が、これもまたリアルなものとして経験される。私たちが自分の夢の中の怖がらせるような物事を怖がり、私たちは、自分の生活などに対して不安を感じる。

これらの違いは、二つの極端な例である。とはいえ、私たちの知覚は、目覚めている生活の、さまざまな領域において、私たちがリアルなものとして扱うさまざまな物事のバリエーションと私た

ちがそれらを扱う方法をも含んでいる。

限定された意味領域

Schutz は、生活のこれらのさまざまな領域について、どのようなことがいつも決まって日常生活にリアルなものとして適用され、たとえば、芝居や科学や宗教などにおいて、異なる(またある意味では、無関係な)標準を持つ程度を示すために、限定された意味領域という言葉で言及している。

ここで、Schutz は、相対主義者になっているわけではない。すなわち、彼は、これらの意味の領域のいかなるひとつのリアリティも、他のいかなる領域のリアリティと同様に、真正なものだと主張しているわけではない。むしろ、彼は、人々がその人たちの経験を理解する方法や、どのようにその人たちが、その人たちの行為の繰り返しの中で、ひとつの枠組みから他の枠組みへと(いわば)どのように切り替えているのかを記述しようと試みている。それにもかかわらず、人々の経験の中で、その人たちは、これらの意味領域のひとつを、主要なリアリティ、すなわち、日常生活の世界を意味するものとして扱っている。彼は、この主張に二つの理由を与えている：

- 1 他の意味領域へ入ったり出たりする切り替えには、日常生活の世に入ったり出たりする動きが含まれる。
- 2 異なる領域の出来事が比較される場合には、日常生活のリアリティという基準が、特徴的に、他の基準に優先する。

(1) を、劇場に出かける実例で例証することにしよう。私たちは、まず、そこで車を止め、チケット

トを買い、席を見つけて、明かりが消えるのを待つ。すべてが、私たちの日常生活における出来事である。カーテンが上がったあとは、私たちは、特定の世界に熱中するかもしれない。その世界とは—そのリアリティにおいて—演劇によって企画されたものであり、劇を見ているあいだ、その事実をリアルに扱うものであり、たとえば、Martin という人物が、人間の一家を訪れて、人々や出来事にさまざまな種類の不可思議な影響を及ぼす。カーテンが降りると、私たちは、日常生活の世界、劇場を去り、車を見つけるなどという日常的な生活の世界に戻る。私たちは自宅に帰り、車を外に止め、ドアを閉めて、寝床に着く前に、他の毎日することをやる。そこで、私たちは、睡眠に入り、そして、夢というリアリティに入るのだが、そこでは、またしても、(日常生活の観点からは)不思議なあらゆることが起こり、私たちが夢を見ているあいだは、リアルに起こっていることとして経験される。要するに、私たちは、日常生活を経由して、限定されたひとつの意味領域から、別の領域へと移動したのである。

(2) に関しては、私たちが劇場に入るとき、私たちは、普通の家庭にエイリアンがいるのを、リアルな出来事として目撃するが、劇場を去るときには、私たちは、電話に飛びついて、Martin のようなエイリアンが、私たちのあいだで生活していることが、いまでは、証明されていることを友たちに話したりはしない。私たちに非常によく分かっているのは、日常的な世界では、劇場のパフォーマンスの一部として、ステージで起きた出来事は、本当に起こったことには含まれないということである。同様に、私たちが配偶者と離婚した夢を見たとしても、それは、目覚めている生活では、実際に離婚を経験したこととは認められないことだろう。

最後に、科学と常識のあいだの関係も、この議論の観点から、効果的に取り扱うことができる。科学は、日常生活の世界からアクセスできる、別の限定された意味領域である。すなわち、それもまた、日常的な世界の優位性を受け入れるものなのである。とはいえ、私たちがこの論点をどのように意図しているかに、注意深く心に留めておいてほしい。それは、一日を朝食をとることで始める物理学者によって例証されるが、彼は、メールを読み、あるいは新聞を読み、職場に車で出かけ、科学の世界に入る前に、たとえば、真剣な科学的な研究に取りかかる前に、コーヒーマシンのまわりでおしゃべりをする。もちろん、現役の科学者にとっては、科学の世界は、日常的な生活の世界に埋め込まれているものである。日常的な生活の世界と科学の世界との関係は、現役の科学者の毎日の決まりきった仕事として、ある物理学の教授による論点によって、うまくとらえられ、人類学者の Clifford Geertz によって引用されている。

物理学とは、生活のようなものである。すなわち、完成というものはありえない。それは決して、完全に縫い合わせられることはない。それは、すべて、より良く、より良くという疑問であるが、あなたは本当に、どれほどの時間と関心を、それに持っているだろうか。宇宙は、本当に曲線を描いているのだろうか。それは切ることも、乾かすこともできない。さまざまな理論が現れては消えてゆく。ある理論が正しいか、誤っているかということではない。理論には、新しい情報が入ってきたとき、変化するという、一種の社会的な位置付けがある。「アインシュタインの理論は正しいか」を調査して見ることもできる。アインシュタインは、いまのところは、どちらか

といえば正しい「部類にはいって」いる。だが、それが「本当」かどうか、誰に分かるというのだろうか。私の考えでは、物理学者は、私にはまったく物理学に認められない、ある種の汚れたさや、公正さや、真実味があるという見解が存在するようである。私にとっては、物理学は、朝食と夕食のあいだにする活動である。誰も、絶対的な真理については何も言っていないのである。ことによると、真理というものは「外側」にあるのかもしれない。人々はこう考える。「そうだな、一般的な相対性という見地からみて、このアイデアは間違っているか、正しく見えるかのどちらかだ」と。(Geertz 1983 : 162 f)

科学の研究に真剣に従事するとき、科学者は、日常生活の特定のお決まりの事柄を考慮することとは、無関係に思われるかもしれない。また、わきに置くものかもしれない。たとえば、支払い小切手が、無事に役割を果たすかどうかを心配することは、物理学に必須な要素ではない。その人が真剣に研究をしているあいだは、科学の基準が、何がリアルで、何がそうではないか、物理学者が、何かしら、今までのところはまだ知られていない事柄の薄片を発見したのかどうか、プロッター(作図装置)のマークは、単なる機械のインクの漏れの結果に過ぎないのかどうかを決める。だが、ここでさえ、Geertz の物理学者が、どのようにこれらの事柄に関する不一致が解決されるのかを、誰が正しく、あるいは間違っているかを定める、認識できる程度に普通の方法、たとえば、調査をすることなどに言及することによって、記述していることに注目しておこう。労働の一日の終わりには、物理学者は、完全に日常生活の世界に戻り、そのリアリティの基準を甘受する。たとえば、給料をもらう必要や、税金を払う必要の議論

ではなくとも、なぜなら「給料」や「税金」という概念は、物理学では、リアルなものと認識されず、物理学の語彙としては現れることさえない。だが、それは、労働しているとき、リアリティを定義するのに使われるものである。

Garfinkel：社会秩序について再考する

Talcott Parsons (第5章参照) と Schutz は、往復書簡をかわしていた (Grathoff 1978)。それは、主にお互いに対する欲求不満を生んだ。Garfinkel がとった道そのものは、ことによると、Schutz 自身は理解しなかった。にもかかわらず、Parsons によって提出された問題は、Schutz によって、非常に異なる問題の組み合わせとして開拓され、Harold Garfinkel によって解明されるまで存続したのである。事実として、Schutz によって着手されたプロジェクトを通しての研究は、Garfinkel を、Parsons や、いかなる他の社会学者によって提唱されたような種類の概念から、はるかに遠いところへと運び、社会学を行うことそのものが主要な注意の焦点となった。最初のうち、Garfinkel は、科学と常識のあいだの関係に関する論点を、限定された意味領域として、社会学そのものに適用した。Garfinkel は、科学の世界と日常生活の世界を、行きつ戻りつする活動に従事する社会学者の含みを引き出したかった。興味深いことに、社会学にとっての日常生活の世界は、他の専門科目とは違って、社会学者の研究のトピックでもあり、自分が科学的な態度を使う主題でもある。社会学は、日常生活の世界に対する調査の追求である。だが、その系統的な調査は、日常生活だけではなく、日常生活そのものと世界の中で実行される。危険なほど過度に単純化された Garfinkel の立場の言明は、たとえば、科学的な世界と日常的な世界、すなわち、科

学的な指向と常識による指向、そのあいだを行きつ戻りつする、この活動が、とくに推論において、社会学的な思考を、とてつもなく曖昧な状況においているというものである。この曖昧さを一掃するには、社会学的な推論にある常識による要素に対して、これまで以上に直接的に明白な注意を向ける必要がある。

さらに一般的に言って、Parsons は、社会学的思想と実践の模範として扱われている。Schutz と Parsons の主たる違いは、彼らが分析上の問題だとしたことにある。問題があるものとしての、常識とコミュニケーションに関して語ったことで、社会学者たちが、単純にそれらを当たり前のことと見なすことなく、そのような事柄に戸惑いをもっていたことを思いだそう。すなわち、それは、社会の人々がしていることや、すべきこと、するのが難しいとか、不可能だとか思っているということを、提言してなどいない。Garfinkel は言っている。Parsons が自明のものとしていたのは、社会学的な調査を、社会の中で企てられることができ、社会というものを、そのメンバーのあいだで、共通に知られた世界として利用できるということである。しかも、社会学的な調査者が容易にそれを彼らと共有できると見なしているということである。調査者が、日常生活の世界を(大部分は)、調査される人々と共通に知られているものだと仮定することができるという事実は、調査者と調査を受ける人々のコミュニケーションの必須の前提である。それというのも、人々が意志の疎通ができるのは、その人たちの共有された理解と、その人たちがお互いに何について話しているか分かっていることに基づいてのみ可能なのである。調査の対象となる人々とのコミュニケーションは、些細な事柄ではなく、それは社会学的な調査にとって、必須の要件であり、調査の大部

分には、社会のメンバーに対して、話しかけたり、耳を傾けたり、読んだりすることが含まれている。社会学的な調査そのものは、日常生活の世界の中で行われ、その行為には、日常的な理解に基づく関係性を、調査者が彼または彼女の方法として見出すことが含まれる。Parsons は、社会学的な研究をするための、この条件の組み合わせを当たり前と見なし、それらに対するそれ以上の考察を必要としなかった。これに対して、Schutz は、社会学的な研究そのもののために、これらの条件を作り出すことが、フィールドの研究の一部であるという考えを産みだした。結局のところ、社会学的な調査者が、日常的な環境を理解し、社会の(他の)メンバーと、相互に分かりやすいコミュニケーションを企てるのは、社会生活全般が自然的な態度で営まれているという事実の特別なケースに過ぎない。

Garfinkle は、Schutz の主張を使って、社会秩序の問題の性格を一変させた。だが、社会秩序こそは、Parsons や他の学者たちにとって、社会学の中心にあるものなのである。

社会秩序の問題

Parsons は、彼が提示したように、秩序の問題を、最も深く、最も根本的なレベルの調査として設定することを意図していた。とはいえ、Garfinkel にとっては、Parsons の秩序の問題に対する解決策は—共有された価値観であるが—それ自身が、先立つ社会的秩序の存在を前もって仮定しており、したがって、十分に深く極めたものではなかった。価値観を共有することができるのは、価値観が人から人へと広まり、人々がお互いを理解し、人々が十分な理解を共有して、お互いに意志の疎通をはかることができる場合だけである。人々がお互いに他の人の行為を理解できるよ

うな条件を理解しようとする試みが、このように、Garfinkel の再考の内容となっている。その再考察は、Schutz の概念の観点からのものであり、Parsons の秩序問題に関わるものでもある。

Garfinkle は、この問題を再度位置付けしなおすことが、エスノメソドロジーという駆け出しの冒険的企てを他のすべての種類の社会学から切り離すことになることを確信していた。これらの他の種類の社会学は、圧倒的に、世界の存在を常識で、当たり前のものと受け止めている。それは、彼らの理論では、所与のものであり、彼らの調査の研究の単純で検討の必要がない前提だったのである。とはいえ、彼の取り組みは、両方の点で異なるものであり、他の社会学的な理論が提示し解決しようと追求している同じ種類の問題に直接に向けられたものではないのである。エスノメソドロジーが何をしようと試みるものであれ、それは、直接に、Hobbes から Parsons に及ぶ議論の道筋を続けるものではない。

エスノメソドロジーとはいかなるものか

私たちは、リアリティというトピックについて再び考えることで始める。自然的な態度のもとで、限定された意味領域の中で行動している人々は、その人たちの環境の多くの特徴を「リアル」なものとして扱い、それらを他の「リアルでない」対象の特徴とは区別している。Garfinkel が、エスノメソドロジーとして提示した重要な疑問のひとつは、人々が何がリアルか、リアルでないかを定める際の基準に関するものである。彼にとっては、それが研究のトピックなのである。彼が問いかけているのは、人々が彼が何かをする方法で進行することが正しいかどうかではない。また、これらの物事を決定するひとつの方法が、他のも

のより優れているかどうかでもない。彼は、人々が、彼の目の前で何が本当に起こっているのか決める方法について、まったく評価はしない。彼の唯一の目的は、それらが何だろうと、人々が「何が本当に進行しているのか」と「何が本当に起こっているのか」を人々が決定する方法を記述し分析することなのである。

エスノメソドロジーとシンボリック相互作用論

一見したところでは、エスノメソドロジーは、シンボリック相互作用論に類似しているように思われる。結局のところ、シンボリック相互作用論は、定義や状況に多大な関心をしめしており、人々がどのように状況を定義するかを検討するという考えは、私たちが、いま提唱している概念とほとんど同じであるように思われる。シンボリック相互作用論は、状況の定義を、相互作用的な事柄として扱い、定義の方法—共有された意味—特定の場で、一緒に相互作用しあう人々のあいだで、作り出される方法を強調する。Garfinkelのエスノメソドロジーは、確かに、相互作用的な事柄を受け入れる。だが、彼自身のプログラムは、それらを、方法論的に扱うものである。「人々の・方法を学ぶ」というラベルそのものが、単純に「社会のメンバーのあいだで用いられている方法の研究」とか、より詳しくは「社会のメンバーのあいだで用いられている意味をとったり、事実を確認したりする方法の研究」と訳すことができるものである。

メンバーの方法

そういうわけで、エスノメソドロジーの注目は、社会のメンバーが、何かがリアルであるかどうかを決めるために採用する方法を同定することと、

そうする際に、どのように方法が採用されるかを理解することに焦点を合わせている。

メンバーの方法

日常生活で、どのようなことがリアルで、どのようなことがそうでないかを決めるには、以下の広範な範囲の区別をひとつか二つすることになる。すなわち、リアルなものと、想像上のもの、事実と虚構、真実と嘘、正しいことと正しくないことなど、それを決定することは、結果または結論として、本当のことと誤りとして非難されること、可能なことと不可能なこと、本当に起きたことと夢に過ぎないものの区別をすることになる。

エスノメソドロジーは、その核心において、これらの研究に他ならない。それは、たとえば、人々がその人たちの日常生活や、仕事や、レジャーや、家族や、他の行為や、いかなる疑問であれ、何が「実際の真相」なのかとか、「本当にそうか」とか、「確実に事実」なのかとか、「疑いの余地なく正しい」のかなどに関する疑問が発生したときに、その疑問を解決するための、そのような区別をすることを含んでいる行為のそれらの側面を見ることによって、それらに対するアクセスを手に入れることができる。日常生活の出来事の行為は、そのような疑問に応答し、それらを解決し、非常に、しかもまったく日常的に、行為の組織化の基本として一次に何をすべきかを定めることで満たされている。したがって、それは、私たちに、日常生活ではどのように行為が組織化されるかを研究する方法を提供してくれる。明らかに、さらにまた、その取り組みは、人々の意味を認識し、事実を見出す方法のひとつの特別な限定された側面を孤立させることを意味しているわけではない。それというのも、メンバーの方法は、広範

に、日常生活に浸透しているからである。

これらの方法は、まったく普通のもので、馴染深く、予想できる方法で、人々が、さまざまな物事のリアリティを調査し、決定する。たとえば、非常に普通の方法は、ひとつの情報の出所を、別のもものと比べてチェックするという単純で馴染み深いものである。たとえば、もし誰かが、信じがたく聞こえる何らかの出来事について、あなたに語ったとしたら、あなたは、新聞を読むか、テレビのニュースを見るかして、それがそこで報告されているかどうか確かめるかもしれない。もし、そうだとしたら、それは、あなたが聞かされたことを確認したことになる。その反対のことも具合よくいく可能性がある。たとえば、何かがテレビや新聞で報告されたとき、新聞で読んだことが本当か、誇張されていないか、大部分が、でっち上げかを、あなたが報告された事柄に関わっていたことを知っている人物に聞いてチェックすることもできる。明らかに、そのような方法は、たくさんあり、その中には、私たちが概説したばかりの方法より、かなり洗練された行為も含まれる。たとえば、物理学における現在の研究は、亜原子粒子に関する前提条件が正しいかどうかを調べるが、それには、何マイルもの長さの機械(加速装置)の使用が含まれており、数百人とは言わないまでも、何ダースもの研究者が配属されている。よりありふれたものとして、12人の陪審員が法律違反に対する告発が正しいかどうかを決めることになり、プライベートルームにおける隔離に先立ち、敵対関係にある証人についての概要の説明と、法廷における議論に耳を傾け、プライベートルームでは、ことによると長引く共同討議を通して、陪審員たちは、告発に対する結論に辿りつかなくてはならない。

エスノメソドロジーにとっては、状況の定義と

社会的なリアリティの定義は、まったく普通のことである。社会のメンバーに関すること、何が本当で、何が誤りか、正しいことと、不正確なこと、事実とでっち上げられたことを決めるためのまったく馴染み深い方法をさす抽象的な用語に過ぎない。そのような疑問は、社会生活の多くの領域で発生し、たとえば、法廷における陪審員たちの活動や、科学的な研究室における実験や、あらゆる種類の金融的な取引において見出すことができる数字をチェックし、ダブルチェックすることなど、下されるべき決定に関する活動の種類に特有な多くの特徴を持つ方法によって、解決されている。エスノメソドロジーの中心的な提案は、社会のメンバーが、その人たちの日常的な出来事において、社会的なリアリティを定義する取り組み方法を、密接に、詳細に検討することである。それが狙いとしているのは、これらの方法を非常に明確に同定することである。この取り組みに対する主な理論的な根拠は、社会生活の要素の多くが、社会学的な分析に欠けているということである。すなわち、これに対する社会学的な記述、または、その活動は、特徴的に Garfinkel が「欠けている何ものか」と名付けたものを示している。言い換えれば、実行される出来事を日常生活の世界の中でなされる、単純に当たり前の出来事と見なしている。研究対象となる人々が特定の仕事に従事しているという事実、たとえば、医学的な治療とか、何らかの技術的な装置を修理するとか、初等の数学を教えるとか、有罪か無罪かについて議論するという事実は、しばしば、社会学的な分析の焦点というより、口実になっている。このような理由で、シンボリック相互作用論は、異なる種類の仕事のあいだの類似性のほうに関心を持ち、表面上は異なるすべての多くの種類の仕事に共通の社会的な過程が見られる程度を強調するこ

とを狙いとしている。他方、エスノメソドロジーは、具体的な仕事の種類の詳細を同定するほうに興味を持つ。

たとえば、科学の社会学は、伝統的に、科学的なコミュニティの構造や、科学者の経歴の形態や、専門科目や科学者の位置付けに用いられる威信の階層構造や、科学的な業績を動機づけたり、認めたりする報酬と表彰のシステムなどに関係する。この文献には、科学的な研究に関することは非常にわずかしか出てこない。現役の科学者たちは、その人たちのとてつもない時間を研究室や観測所や、類似の職場で、観察や実験を行うことに費やしている。この事実は、エスノメソドロジー的な研究が、今は盛んになっている研究室の科学に関する社会学的な研究の領域を活気づける一助になるまでは、ほとんど認められていなかった。

さらに、その仕事に、たとえば、病気を診断や科学的な発見が、それに含まれる行為が組織化される方法という観点から、類似性を持つかもしれないことを重視する可能性がある。その一方で、婦人科学は、天文学とは十分に異なり、それぞれの研究者たちは入替れわることはできないという事実は残る。どのように行為が組織されるのかを理解する観点から、そのような組織化は、内生的なものかもしれないこと、たとえば、考慮の対象となっている行為の詳細を提唱することは、まったく理にかなったことである。結果として、私たちは、他の種類ではなく、その仕事をするためには、どのように行為が組織化されなければならないのかを理解しなければならない。次には、私たちは、参与者たちがそれらの仕事を実行するために使う方法を特定しなければならない。たとえば、どのように医師が暫定的な診断を下し、それを正しいものとして確認し、さらなる行為を定めるのか、あるいは、どのようにして、観測所に

いる天文学者たちが、自分たちが、大きな天文学的な発見をいまにもするばかりになっていることに感づき、それを確認するのか、たとえば、どのようにして、その人たちの観測所における研究が、銀河系ほどに遠方の天体という対象のリアリティを確立するのか、その方法を特定することが、私たちに必要とされる。

この注意の焦点のもうひとつの重要な理由は、実践的な行為としての行為の分析に対する関心である。それは、人々の実際の行為の不可避の特徴である。そして、それらは状況に即したものである。たとえば、それらの行為は、特定の環境で、それを介して実行されなければならない。それというのも、それらを実行する人々は、それらの環境に対して、交渉の余地のない態度をとることができないのである。たとえば、脱出のための乗り物を使いたいと計画している銀行強盗は、駐車スペースという問題に直面する。都市の中心部の通りは混雑していて、密集して駐車されており、合法的な駐車スペースを見つけることは難しい。もし銀行から略奪しようとするなら、二重駐車したり、禁止された領域に駐車したりして、法的な注意を乗り物に引き付けたくないはずである（[Letkeman 1973]を参照してほしい）。銀行強盗は、そのとき、その人たちの車を駐車する必要性を「ささいな」ものとして、軽くあしらったり、顧みなかったり、「無関心」だったり、「銀行の略奪に不必要な」ものと扱うことはできない。すなわち、適切でない注意を引かないような方法で駐車する必要がある。成功させるには、その人たちは、この問題に対処する必要がある。それは、もちろん、ある都市の中心と別な都市とでは異なる可能性がある。

状況性

行為のいかなるリアルな道筋にも、その状況の特殊性に対する応答が含まれている。すなわち、それは特定の条件に対して形成されなければならないし、特定の条件とは、その状況であり、それらを「達成」の素材として使うことである。そうすることによって、それは、たとえば、制御しにくい条件など、所与の状況の組み合わせで、思いがけなく、見ることがほぼ不可能でさえある形で発生する、急務や偶発事に、成功するために、太刀打ちしなければならないのである。

このように、行為の組織化を理解することには、その道筋が、行為を実行する人々によって実践的な状況—状況に即した条件で—構造化されることを理解することが含まれている。行為は、状況に即した条件の中でなされる。

行為の実践的な状況性を認識することによって、行為のシークエンスの最も慣例化され、標準化された厳格に規定された場合にさえ、即興的な要素が明らかにされる。実践的な偶発事は、仕事の最良に計画された準備にさえ影響を与えるものである。もちろん、人々がすることの圧倒的に大部分は、厳格に規定されたり、高度に標準化されたりしたものとはほど遠い。この見解に基づいて、行動の組織化を理解することは、その企てをした人たちがどのように、行為のシークエンスの道筋を、その人たちがそれに従事するときさえ、苦心して達成するか、その人たちが、行為のいかなるシークエンスの道筋に対しても、次に何をなすべきかを苦心して達成しているかを理解するという事柄なのである。そのような理解は、必然的に、参与者たちが、いかなる選ばれた行為の道筋の特定の状況に対して実践的な注意を払うのと同じぐらい、社会学者が、綿密な注意を払うこ

とを含む。それというのも、特筆したように、その行為を企てる人々は、その人たちの選んだ行為の道筋を生成し、成功するために、その人たちが行為をする状況の数え切れないほどの分類された特徴を処理したり、管理したりしなければならない。特定のものに対する注意は、そのとき、熱烈で、まったく綿密である必要があるかもしれない。

当面の状況に対する注意は、意味と認識の問題を解決するために、きわめて重要なものでもある。Garfinkelの最も悪名高い用語法のひとつは、指標性、あるいは文脈依存性という概念である。この用語は—Garfinkelによってではなく—言語に関する哲学によって、作られてきた—それは、普通の言語には、その意味が、それらが使われる特別な機会に結び付けられている用語が数多く含まれているということに注意を向けるものである。明らかな実例は、たとえば、代名詞の「it」や「theirs」の使い方である。Garfinkelが特に言及しているのは、その論点が、特別な社会階級の言葉を超えて、一般化されうることである。いかなる論点も、その文脈がどのように聞かれるかしだいで、違った受け取り方をされう。この疑問は、したがって、厳密には、誰かが、どのようにある論点が、曖昧でない明白な意味を持つものとして聞くかということである。厳密に、それが、産出された文脈の状況の適切に関連している状況との関係で、どのようにそれが理解されるか、ということなのである。

おわりに

これまで、『Perspectives in Sociology』の初版、第3版、第4版について概観してきた。最初に出版された1979年版と第5版である2006年版の出版のあいだには、30年ちかい歳月が流れている。このあいだに出版された第2版は、初版にわずかに改訂・加筆（Berger & Luckmannの項が削られ、M. Lynchが取り上げられる等）したものである。ここにあげた第4版と最新版でもある第5版とのあいだの改訂部分も、また、わずかである。いっぽう、1990年の第3版は、それまでの初版、第2版とも、また第4版、5版とも大きく異なっている。それは、それまで協力者だったD. フランシスが著者に加わったことによる。この版のEMの部分は、主に彼が執筆を担当したと聞いている。社会学理論の教科書として30年以上読み継がれてきた『Perspectives in Sociology』であるが、その内容を継続的におっていくことで、エスノメソドログストの自画像の変化が読み取れた。

最後に『Perspectives in Sociology』から見られる「EMとは何か」という自画像の変化について確認しておきたい。それはまず、扱われる項目の変化であり、事例となる対象とその強調点の変化でもある。それを一言で言うと、メンバーの誰もが「気がつかない方法」から、メンバーの誰もが「気にもかけない方法」への変化であるといえるだろう。版が進み、取上げられている項目や事例が変わることには、EMに特有のいくつかの概念へ理解が進んだこと、教科書全体の構成や文体が変わったことも大きく影響しているだろう。だが、この強調点の変化にはGarfinkelの先導的な仕事や研究方針に基づいて、EM研究者が様々な場でフィールドワークを行なうようになり、その対象メンバーにとってあまりにも自明で「気がつ

かない方法」から「フィールドにいる誰でもが知っている」が「気にもかけない方法」に移行したことが大きく影響しているように思われる。具体的に言うと、1979年、1984年版では、現象学のまなざしが発見した「文脈依存性」、「相互反映性」、さらには「ドキュメントを証拠として全体を説明する方法」といったメンバーの実践の構造上の特徴が強調されていた。これらは、私たちの社会生活のリソースでありながら、メンバーのすべてが「気がつかないもの」である。当時、EMは、社会学研究上のリソースをトピックとすることで広い意味で、社会学の自己理解を広げるものであったといえるだろう。そして、1998年以降は、こうした術語を扱う項目はなくなっている。

会話分析という営みが成果を上げることは、言語と相互行為の構造についての自己理解を増すことでもある。そのいっぽう、1984年版から取り上げられ、1990年版からは会話分析とともにEMの主要な研究の手法とされた「ワークの研究」は、その場に馴染みのない人には「気がつくことのできないもの」を扱う営みである。1998年版の構成で明らかかなように、EMは、ある時期から、社会学を行なうこと的前提としてフィールドについての理解を重視するWinchの概念分析と結びついた。それによって、状況性の中において、「そこにいる誰にでも自明」だが社会学者以外は「気にもかけない」実践の詳細に学ぶ営みとする自画像を描くことになったように思われる。このような社会学者以外は「気にもかけない」実践は、実のところ、そこにいない、その場の実践に馴染みのない人には「気がつくことのできない方法」なのである。すなわち、「ワークの研究」に力点を置くエスノグラフィー指向のEMは、他者理解に強調点がおかれる営みであることになる。

研究対象の選択という点から言うと、フィールドワークに支えられた概念分析という視点は、社会学が、実証主義に代表される科学主義の基準によらず対象を選ぶことに一定の実践的な意義があることを明らかにする。近年のEMが、メンバーが用いている豊かな概念の組織と、その使用方法という、「フィールドにいる誰でもが知っている」が「気にもかけない方法」を「一目でそれと分かる自然な説明可能性」や「実践学的な説明」として研究対象にするようになってきたことが、教科書における自画像からも裏付けられる。そして、その方法こそが「人々をXにしている」ものなのである。

文献

- Garfinkel, H. 1974. "The Origin of the Term "Ethnomethodology"" in Roy Turner (ed.) *Ethnomethodology*. Penguin pp. 15-18=山田富秋, 好井裕明, 山崎敬一 (編訳) 1987 「エスノメソドロジー命名の由来」『エスノメソドロジー』せりか書房 pp. 9-18.
- Cuff, E. C. & G. C. F. Payne (eds.) 1979. *Perspectives in Sociology*. Gerge Allen & Unwin.
- Cuff, E. C. & G. C. F. Payne (eds.) 1984. *Perspectives in Sociology*. Gerge Allen & Unwin.
- Cuff, E. C., Sharrock, W. W. & Francis (eds.) 1990. *Perspectives in Sociology*. Routledge.
- Cuff, E. C., Sharrock, W. W. & Francis (eds.) 1998. *Perspectives in Sociology*. Routledge.
- Cuff, E. C., Sharrock, W. W. & Francis (eds.) 2006. *Perspectives in Sociology*. Routledge.

謝辞：本論文の執筆にあたって本学文学研究科の福谷文子氏にご助力いただいた。また、畏友、宇佐見信夫氏の協力がなければ本論文は完成しなかった。お二人に感謝したい。